国際教室をめぐる課題と展望

～おもに教育材の収集・整備・共有化の問題をめぐって～

編集　国際教室等における教材整備のための検討委員会

発行　財団法人 神奈川県国際交流協会

はじめに

「外国人住民」の「定住化」がすすむなか、地域の学校で学ぶ外国人児童・生徒がふえている。自分の力ではどうにもならない理由によって、幼くして多くの人生の岐路に立たされてきた子どもたちが、「母語」と「日本語」、複数の「国籍」の狭間で、いま、揺れている。

学校では、「国際教室」（地域によっては「日本語教室」とも呼ばれる）を中心に、そうした児童・生徒の学習を保証するためのさまざまな取り組みがおこなわれてきた。

おもに来日間もない子どもたちを対象とした「日本語指導」や算数や理科、社会科などの教科の補習、さらには、「母語教室」や生活に関する相談など、「国際教室」での活動は実に多岐にわたる。

しかし、外国人児童・生徒がいるすべての学校にこうした「国際教室」が設置されているわけではない。日本語指導が必要な外国人児童・生徒が校内に５人いる場合には担当教員が１人増員されるが、５人に満たない場合には、クラスのなかでそうした児童・生徒を受け入れて対応をしていかなくてはならない。また、せっかく設けられた「国際教室」も、全校的な取り組みになっていないため、残念ながら在籍学級と「国際教室」のつながりが不十分であるという声も聞こえてくる。

神奈川県国際交流協会では、2001年から「国際教室」担当の教員、教育委員会・教育センターにおいて外国人児童生徒教育の分野にたずさわる人びとととともに、「国際教室における教材整備のための検討委員会」を設置した。この検討委員会は、「国際教室」の運営をめぐる課題を机上で整理するだけでなく、課題の解決に向けた具体的な作業を、さまざまな人びとが知恵を絞りあい、職掌や地域の壁を乗り越えて編み出していくことを目的とするものである。委員会では、県内の小・中学校や教育センター等に所蔵されている教材群の収集と整備・共有化の作業を開始した。

この報告書は、この検討委員会での作業の過程でおこなわれた議論を反映したものである。学校現場はもちろんのこと、学校現場と連携をとりつつ活動を進めているNGOをはじめ、多くの方々に手に取っていただければ幸いである。

財団法人 神奈川県国際交流協会

●目　次●

序に代えて

・「国際教室」の現状と検討委員会の設置経過　…… 3

第1章　学校における取り組みと展望について

・横浜市いちょう小学校 での実践をめぐって　金子正人 …… 7

・横浜市立港・上飯田中学校での実践をめぐって　村田栄一 …… 15

・横浜市立下野谷小学校での実践をめぐって　村井典子 …… 23

・横須賀市立浦郷小学校での実践をめぐって　黒坂陽子 …… 29

第2章　教育材の分類・整理をめぐって

・教材整備のための分類方法について　石川一喜 …… 45

序に代えて
「国際教室」の現状と検討委員会の設置経過

序にかえて
～国際教室の現状と検討委員会の設置経過～

財団法人 神奈川県国際交流協会
事務局長　山崎　純二

外国籍児童生徒の教育のあり方をめぐっては、ここ数年、複数の機関・団体から調査報告・提言や書籍が相次いで出されている。例えば、『学習と進路の保障を求めて～外国人の子どもたちとともにⅡ～」（神奈川県教育文化研究所「外国籍生徒の学習と進路調査研究部」、2001 年３月）、外国籍県民かながわ会議の中間報告（2001 年 10 月）。『ニューカマーと教育』（志水宏吉・清水睦美編、明石書店、2001 年 10 月）などがある。これらの調査報告・提言書でも、今後の施策として、国際教室担当教諭の加配（増員）や、日本語指導教材の開発・整備、学校と地域の補習教室との連携・協力体制の充実などをあげており、外国籍児童生徒教育をめぐる現状の把握と課題の解決に向けた施策の方向性については、自治体・ＮＧＯ・研究者の間でほぼ共通した認識が形成されつつある。

当協会では、外国籍児童生徒を取り巻く教育環境の改善に向けた具体的な第一歩として、昨年 11 月に国際教室等で利用される教材の整備・共有化を目的とした検討委員会を設置し、国際教室の現場で日々“格闘”している教員の経験と知恵を、多くの人々が共有できる広場（フォーラム）を創出する事業をスタートさせた。今年度の目標は、学校や教育センター等に所蔵されている日本語指導等の教材情報を集め、整理するとともに、将来これらの情報をインターネット上で発信する場合の内容構成と方法論を検討することである。どこまで当初のねらいが達成できたかは、本報告書をご一読いただき、読者の皆さんの判断を仰ぎたい。今後の展開としては、来年度中に、上記の教材情報をウェブ上に掲載したいと考えている。

さて、ここで検討委員会運営の隠れた「ねらい」についてふれておきたい。検討委員会の主目的は、言うまでもなく教材情報の共有化であるが、もう一つ、外部からは見えにくい外国籍児童生徒教育をめぐる「現実」が、検討の過程を通じて照らし出されるという副次効果を、事務局は事前に予測していた。実際、国際教室という現場にいなければ見えにくい臨場的な問題群が、検討の場を通じていくつも浮かび上がってきた。これらの問題は、すでに他の研究報告等で指摘されている内容も含んでいるが、再確認という意味で以下に記載することにしたい。

1，県内のどこにどのような教材があるかという基礎的な情報が共有化されていない。このため、同じ内容の教材を自治体が個別につくるケースが少なくない。
2，教材リストは出版されているが、実物教材を手にとって見られるリソース・センターが身近にないため、教材の内容を確認して購入することができない。
3，初期の日本語指導教材は数多くあるが、教材の評価を含めた「使える」情報が少ない。
4，日本語指導から教科指導への「橋渡し期」の教材が不足している。
5，手作り教材が数多くつくられているが、こうした情報を共有する場が限られている。
6，母語での対応が必要となる場面もあるが、母語教育を実施する制度が確立していない。母語対応については、日本語指導協力者等に協力をお願いしているのが現状である。
7，外国籍児童生徒のための国際教室と日本人児童生徒への国際理解教育をつなぐ視点が弱い。
8，国際教室は学校の中で周縁的な位置づけをされている場合が多く、全校的な取り組み体制がとられにくい。
9，国際教室が設置されていない学校では、外国籍児童生徒をケアするための人的体制がない。
10，初めて国際教室を担当する教員が参考にする「国際教室運営マニュアル」ができていない。
11，地域で補習教室を運営するＮＧＯと学校が連携するための仕組みができていない。

これらの課題には、短期的に解決できるものと、中・長期的な視点に立って処方箋を考えねばならないものが混在している。検討委員会のテーマである教材情報の共有化に関して言えば、インターネット上に教材情報を掲載すること自体は、比較的短期間で実現可能である。しかし、これらの情報をタイムリーに更新し、知恵の共有を図る人的ネットワークを恒常的に維持していくには、県・市教育委員会、学校、国際交流協会、ＮＧＯ等が、信頼関係を築き、相互に連携・協力しなければ実現は難しいだろう。

当協会では、自治体とＮＧＯの双方にパイプを持つ第三セクターとしての特質を生かし、教育委員会・学校と地域で子どもたちの学習支援を行うＮＧＯとの連携・協力関係を築くための橋渡しを、今後とも積極的に進めたいと考えている。去る２月２４日に実施した「日本語フォーラム～日本語・こども・ネットワーク」という事業も、教育関係者とＮＧＯの間に顔の見える関係を築くことをねらいとした、当協会のささやかな試みの一つである。

本報告書が、多文化共生の教育環境の実現に日頃から尽力をされている読者の皆さんに、少しでも参考になれば幸いである。

●国際教室等における教材整備のための検討委員会の経緯●

■第1回■　2001年11月28日

・金子正人・・・横浜市立いちょう小学校における実践をめぐって

■第2回■　2001年12月18日

・村田栄一・・・横浜市立港・上飯田中学校における実践をめぐって

・村井典子・・・横浜市立下野谷小学校における実践をめぐって

■第3回■　2002年1月22日

・阪本智子・・・川崎市における実践の概況

・黒坂陽子・・・横須賀市立浦郷小学校における実践をめぐって

■第4回■　2002年2月28日

・石川一喜・・・教材整備のための分類方法について

第1回は、かながわ県民活動サポートセンター601号室、
第2回～4回は、横浜市教育文化センター4F美術研修室にて
開催された。

第１章
学校における取り組みと展望について

金子 正人
(横浜市立いちょう小学校)

■この取り組みが必要なのはなぜか?

資料をご覧ください。提案の前に、どうして今回の企画が必要だったのかということを現場のサイドから考えていきたいと思います。まず外国人児童生徒が増えて、各学校に日本語を母語としない児童生徒が多く入ってきたということが一番の理由に挙げられるでしょう。そして、日本語指導が必要な児童生徒に対して、どのように指導していいのかわからない。あるいは国際教室の専任になっても、日本語がわからない子ども達を前にして、何をしていいのかわからない、という専任の悩み。そうした要因が前提にあると考えます。

では、どうして神奈川県という単位で行うのでしょうか。すでに皆さんもご承知のように様々なグループ、団体、行政機関などがホームページを作って教材の一覧を提供しています。にもかかわらず、ここで新たに県単位で作るということはなぜか考えてみました。「聞ける・見られる・行ける・集える」これがキーワードではないでしょうか。同じ市区町村内で日本語指導を長年されて、経験豊かな先生がいらっしゃれば、インターネットを通して質問することができますし、直接相談に行くこともできるでしょう。また、インターネット上で教材・教具を公開すれば、共有することが出来ます。ゆくゆく教材・教具センターができれば、現物をそこに集約していけます。そして、日本語指導に携わる方々がインターネットを介して、意見交換することができ、必要なら集まって話し合いをすることもできるようになります。そこから新しい何かが生まれてくる可能性も出てくると思うのです。これが県単位の取り組みのメリットではないかと感じます。

■望ましいサイトのイメージ

次に、こうした前提をふまえ見えてくるサイトのイメージについて考えてみましょう。まず始めに、初めて国際教室を担当する先生方に対してサポートをするサイトにならなくてはいけないと思います。あるいは国際教室の設置されていない学校にも役立つ内容が必要です。多くの学校は外国人の子が在籍しても一人、二人、三人というところでしょう。そうした学校に対する支援は欠かせません。自分のクラスに外国人児童生徒が入ってきた担任や教科担当の先生がこのサイトを見れば何らかのヒントが得られるようにしていくことが大切です。

では、具体的にどのような内容が必要なのか考えてみましょう。外国人児童生徒の受け入れにあたってのノウハウ、国際教室運用にあたっての内容、今回の中心になるであろう教材教具の一覧リスト、それから教材・教具センターの情報、さらに相談窓口、掲示板・メーリングリスト、こうしたものが一通りそろっていれば助かると思います。掲示板・メーリングリストは、子どもの日本語指導にあたっている指導者、あるいは子どもの日本語教育に関わっている方が自由に意見交換できる場になればいいと思うのです。

■日本語指導の現場の状況は・・・

こうしたことをふまえて、資料の2ページ目に進みます。現場における日本語指導はどうなっているのかについて若干ふれてみます。今日初めてお会いした方が沢山いますので、一応基本的なところからまとめてきました。この内容は、横浜市をベースにしていますので、他の地域では違う可能性もあります。

国際教室と日本語教室という二つの呼び方があるのですが、その点からお話しします。日本語指導が必要な外国人児童生徒が5名以上在籍する学校に、日本語指導専任の教諭が原則として1名配置されます。これは文部科学省の措置で、加配された先生を中心に、日本語指導に当たる教室を、「国際教室」といいます。ただし、地域によっては「日本語教室」と称しているところもあります。

横浜市の日本語教室は、教育委員会が設置しています。母語に対応できる日本語指導協力者が、(これは多くの場合教諭ではないのですが)初期段階の日本語指導や適応指導に当たる教室で、市内の4小学校に集中教室を持っています。他に「巡回指導」で人数の少ない学校に指導に出向くというようなシステムがあります。横浜市では国際教室と日本語教室は別のものです。

■教材・教具のリストについて

次は、教材・教具リストについてです。一覧表には、実際に本校の国際教室で使っているものを並べています。経験のある先生方はすぐおわかりになるかと思うのですが、「にほんごをまなぼう」（文部省）やそれを基に作った教材「にほんごワークブック」（日本語ぐるりっと　凡人者）などを中心として初期段階の子ども達には学習を進めています。それから、昨年度全校に配布されたマルチメディア日本語教材「日本語を学ぼう」というＣＤがあります。この研究開発には、金沢中の村田先生が関わっていました。こうしたコンピューターソフトも併用しながら学習を進めています。「その他必要に応じて」と書いてありますが、ドリルやワークブックだけでは子どもの興味は続きませんので、子どもの実態に合わせて必要な教材・教具を作成して使っています。この「独自開発教材」というのが、本校では多くのウェイトを占めています。

「学習橋渡し段階（ＪＳＬ※後述）」とありますが、今、文科省で学習への橋渡し、初期段階の日本語指導を終わった子ども達が学習にスムーズについていけるような日本語指導、学習言語支援をしていこうというプロジェクトを立ち上げており、私もそれに関わっています。後ほどこれはお話しします。その段階の子どもたちには「にほんごをまなぼう２・３」、独自開発教材など（資料参照）を使っています。

■国際教室の運営について

次に、国際教室の運営について話をします。「国際教室って何のためにあるの」ということをおさらいしてみましょう。日本語指導、生活適応指導、自立支援、受け入れ態勢の整備（地域との連携）、そして日本人児童と外国人児童の共生のための国際理解教育の発信、その他たくさんの働きがあるのと思うのですが、ここでは主に日本語指導に関することを中心に考えていきます。本校では３つの柱を持って日本語指導を行っています。１番目は基礎的な日本語指導です。ひらがな、かたかな、漢字をはじめ、語彙や表現を豊かにし、言葉のきまりを学ぶ時間です。２番目は教科の補習です。国語や算数を中心にして様々な教科の学習に参加していくために必要な支援をしています。３つ目の柱は総合的な日本語学習です。活動の中から、場面に応じた表現や語彙を学び、自ら表現していく時間です。この時間には前二つの内容が入っています。

「指導の段階で必要な教材や不足している教材は何でしょうか」というご質問をいただいたのですが、私としては教材や教具の不足よりは時間が欲しいと思います。

では、ページをめくってください。指導上の留意点等というところで心がけていることは、①担任と連携し、教室での動きと連動できるような日本語支援を考えています。それから②ドリルに頼る日本語指導から活動を取り入れた日本語指導へ、ということです。これはＪＳＬというカリキュラムにも多く活用しています。③時には子どもたちの精神的な安定を図ることも大切です。④として、定住予定の児童生徒には将来を見越した適切な進路指導も必要です。⑤として、母語についてです。

■子どもの居場所としての国際教室

③と⑤（資料4-③、4-⑤参照）については小山さんから詳しく話してくださいというリクエストをいただきましたので、書いてきました。「子どもの居場所としての国際教室」についてお話しします。国際教室は、外国人児童生徒にリラックス出来る場所を提供するといわれていますが、これには次のような段階があると考えています。子どもは本来、在籍学級で自己表現できるのが一番自然なことです。これは日本人、外国人問わずに自分のクラスで友達と一緒に自分を表現していくというのがあるべき姿だと思います。ですから、はじめから国際教室にその役割を求めるのではなく、まずは在籍学級で外国人児童生徒を受け入れる雰囲気をつくっていくことが大切だと考えます。しかしながら本人の性格や、学校の受け入れ体制等様々な事情からクラスでそれが出来にくい場合に、国際教室や日本語教室の出番が来るのではないでしょうか。本校の場合、外国籍児童は、クラスの中で十分自分自身を表現することができます。日本語が出来る出来ないにかかわらず、友達と一緒に楽しく活動することが出来ています。来日当初は、分からないことが多いのも事実ですが、それは別にしてリラックスした雰囲気の中で学校生活を送ることが出来ます。本校に限って言えば、国際教室はあえて子ども達にリラックスの場を提供するという意味合いは薄くなってきたと言っていいかも

しれません。但し、はじめからそうだったわけではありません。これまでの担当者や担任の努力の結果、学校全体として外国人児童を受け入れていこうという体制や雰囲気ができあがってきたわけです。

ですからどの学校でも同じだとは言い切れません。児童生徒の実態、学級や学校の受け入れ体制によって大きく違ってきますので、国際教室がリラックスできる場を提供するという役割も私たちは十分に認識しておく必要があるでしょう。

■「母語」について

次に母語についてです。現在本校の国際教室や日本語教室では母語指導を行っていません。本地域の児童生徒は定住傾向にあるため、まず、きちんとした日本語を身につけることが大切だと考えています。しかし、母語喪失により、親子間のコミュニケーションがとれないという深刻な状況も発生しつつある現状を考えれば、何らかの手だてを講じる必要はあると感じています。

■JSLといわゆる「橋渡し期」について

５番の文部科学省等の動きというのを順を追って説明したいと思います。先程からＪＳＬという言葉が出てきていますが、”Japanese as a second language”の略です。第２言語としての日本語という意味で、ＥＳＬの日本語版という説明が適当かもしれません。簡潔に言うと、初期指導を終えた児童生徒が在籍学級での学習指導に参加できるように、橋渡しをするためのカリキュラムです。特徴は、「活動ベース」であること、「学び方を学ぶ」学習課程であること、決まった内容を学ぶカリキュラムではなく、担当者の創意工夫によって授業が広がっていくような形のカリキュラムを狙っています。村田先生と共に私も専門委員として文科省で研究開発に携わっています。

概念図を書いておきましたが、来日後１年程度で、初期指導が終わった段階の子どもたちを対象にしたカリキュラムです。これまでの日本語指導では、一通り話せるようになれば、指導を終了するという傾向にありました。ところが話せるようになっても、実際には、字は書けない読めないという現実があります。その子ども達が在籍学級での学習指導についていくために、あるいはスムーズに学習を理解していくために、どうしたらいいかということで、橋渡し的なカリキュラムを充実していくということが考えられています。本校ではＪＳＬを日本語で「総合的な日本語学習」と位置づけています。

最後のページをご覧ください。このページの後ろに資料１があります。「学校教育におけるＪＳＬカリキュラムの開発について」という文科省の文章を添付しておきました。

このＪＳＬカリキュラムをサポートするサイトをインターネット上で立ち上げようという構想もあります。このサポートサイト、これが今回取り組もうとしている県としてのサイト作りと似ている性格があります。文科省の方でサイトを作ったら、リンクを貼って神奈川県に飛ぶように働きかけたいと思います。神奈川での取組が全国につながっていけばよいと思います。

最後に、今回こうしたプロジェクトを立ち上げてくださったことは、私たち現場で日本語教育に携わっている者には非常にありがたいことです。それだけに、大いに活用されるサイトにしたいと思います。お客さんが訪れてくれないサイトでは意味がないので、使いやすく、大勢の人が訪れてくれるようなものを作れたらいいと思っています。ただ、作ったら終わりということではなくて、そこを訪れた人たちがそれを基に交流をしていけるようなサイトになって欲しいという思いが強くあります。

2001/11/28

国際教室等における教材整備のための検討委員会資料

横浜市立いちょう小学校
国際教室担当　金子正人

前提として

①なぜこうしたサイトを作るの？

・外国人児童生徒の増加により、各学校に日本語を母語としない児童生徒が転入学してくる事例が増えた。

・日本語指導が必要な児童生徒が入ってきても、どう指導してよいか分からない。

・国際教室の専任になってはみたものの、日本語の分からない子どもを前にして何をしてよいか分からない。

②なぜ県単位で取り組むの？

・さまざまなグループ、企業、団体、行政機関等がホームページを作って、教材一覧等をすでに提供しているが・・・。

・「聞ける・見れる・行ける・集える」が基本理念？

聞ける：同じ市、区、町、村内に日本語指導のベテランがいる。相談窓口がある。

見れる：インターネットで教材教具が見れる。

行ける：教材センター（仮称）に行けば教材教具がある。

集える：子どもの日本語指導に携わる者同士が集まれる。

③ここから見えてくる必要なサイト像とは？

・初めて国際教室を担当する先生に対するサポート

・自分のクラスに外国人児童生徒が入ってきた担任へのサポート

（自分の学校に外国人児童生徒が入ってきた学校へのサポート）

具体的には

・外国人児童生徒受入にあたって

・国際教室の運用のしかた

・教材教具一覧

・教材センター

・相談窓口

・掲示板・メーリングリスト

現場（横浜市）における日本語指導の実際

１，国際教室と日本語教室

①国際教室

外国人児童生徒が在籍する学校で、日本語指導が必要な児童生徒が５名以上いる場合、日本語指導専任（教諭）が原則として１名加配される（文部科学省の予算措置）。加配された先生を中心に、日本語指導に当たる教室を、「国際教室」と称したり「日本語教室」と称したり地域によって様々。

②日本語教室

教育委員会の採用基準により採用された、母国語の分かる日本語指導協力者（教諭ではない）が初期段階の日本語指導・適応指導に当たる教室。市内４小学校に集中教室をもっている。他に、「巡回指導」で、日本語指導が必要な児童生徒が２人以上在籍する学校に週１回の割合で指導に出向く。

２，教材・教具・カリキュラムリスト（いちょう小学校で実際に使っている）

初期段階（概ね来日１年程度）		学習橋渡し段階（ＪＳＬ※後述）	
○にほんごをまなぼう	文部省	○にほんごをまなぼう２・３	文部省
○にほんごワークブック	凡人社	○公文のドリル	公文出版
○外国人児童生徒のための日本語指導第１分冊	ぎょうせい	○教科書各教科	
○ﾏﾙﾁﾒﾃﾞｨｱ日本語教材「にほんごをまなぼう」	文部省	○独自開発教材	
○日本語の教え方スーパーキット	アルク	その他必要に応じて	
その他必要に応じて			

３，国際教室の運営について

国際教室って何のためにあるの？

①外国人児童生徒に日本語指導をする。

②外国人児童生徒に適応指導をする。

③外国人児童生徒の受け入れ態勢を整える。（地域との連携）

④外国人児童生徒と日本人児童生徒が共生していくための国際理解教育を発信する。

ここでは①についてのみふれる

日本語指導の指導方針

①基礎的な日本語指導（コンピューターの活用）

②教科の補習

③総合的な日本語学習（ＪＳＬ）

資料

資料

４，指導上の留意点等

①常に担任と連携し、教室での動きと連動できるようにする。

②ドリルに頼る日本語指導から活動を取り入れた日本語指導へ。

③時には精神的な安定を図ることも。

外国人児童生徒のリラックスできる場所としての国際教室（居場所の提供）

リラックスの場＝学びの場　が成り立つのか？？？

児童生徒の実態、学級・学校の受入体制、共生の段階による意味づけの変化

④定住予定の児童生徒には将来を見越した適切な進路指導を行う。

⑤母語について

国際教室では母語指導はしていないし、できない。しかし、指導者が母語を理解できれば、子どもたちのよりどころになれる。実際には、担当者が、通訳・翻訳ができる語学力を習得することは困難である。（横浜市ではこの部分を日本語指導協力者に頼っている）

５，文部科学省等の動き

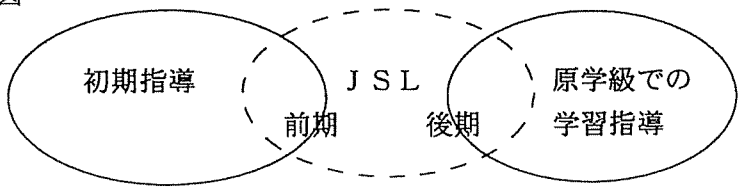
①外国人児童生徒教育は初等中等教育局　国際教育課の所管

ＪＳＬカリキュラムの開発事業（資料１）

初期指導を終えた児童が、学級での学習指導に参加できるように、橋渡しするためのカリキュラム＝日本語支援、学習言語習得支援、学び方の習得支援

特徴①活動ベース②学び方を学ぶ学習課程③決まったカリキュラムではなく、担当者の創意工夫による授業の広がり

概念図



前期＝必ずしも学級での学習とリンクしない、どちらかといえば、日本語支援に重点をおいたカリキュラム。

後期＝学級での学習を意識した、どちらかといえば、学習言語習得支援に重点をおいたカリキュラム

前提＝活動ベース、学び方を身に付ける過程を含んだ授業

本校では・・・・・

Ⅰ：総合的な日本語学習（ＪＳＬ）

Ⅱ：教科支援（国語・算数を中心に各教科）

Ⅲ：基礎的日本語指導（語彙や表現を取りだして学ぶ時間）

ＪＳＬを「総合的な日本語学習」と位置づけ「教科支援」「基礎的日本語指導」とともに３つの柱として運用していくことを検討している。

ＪＳＬカリキュラムサポートサイトの立ち上げ（資料２）

②国立国語研究所（http://www.kokken.go.jp）
日本語教育支援総合ネットワークシステムの立ち上げ（登録必要）

６，その他（理念的な部分で）

今回の企画は、日本語指導に携わる者としては有り難いものです。それだけに、実際に使われる、使いやすいサイトを作っていかなければいけないと感じています。

ただし、作ったから終わりではなく、作った後も、サイトを訪れた人たちのネットワークが広がり、新しい交流が始まる場の提供ができたらいいのではないでしょうか。

資料

資料１

学校教育におけるＪＳＬカリキュラムの開発について

平成１３年４月１３日
初等中等教育局長裁定

１　趣　旨

国際化の進展に伴い、日本語指導を必要とする外国人児童生徒を受け入れている公立学校が増加しており、このような外国人児童生徒が学校生活に速やかに適応するためには、学校における効果的かつ効率的な日本語指導が必要である。しかしながら、日本語の初期指導から教科学習へつながる段階の日本語カリキュラムが必ずしも十分に確立しておらず、各教員の努力に委ねられているのが現状である。このような現状を踏まえ、各学校での日本語指導に対する取組みを支援するため、学校での日本語教育における統一的なカリキュラムを開発し、外国人児童生徒の速やかな日本語習得と教科学習の深化に寄与する。

２　内　容

（１）　小学校レベルの教科横断的ＪＳＬカリキュラムの開発
（２）　小学校の国語・算数・理科及び社会の各教科単位の系統別ＪＳＬカリキュラムの開発
（３）　その他

３　実施方法

（１）　学識経験者、日本語担当教員、日本語指導協力者等からなる協力者会議により検討を進める。協力者会議は本会議及び４部会（国語、算数、理科及び社会の各教科別）で構成する。
（２）　必要に応じて、専門的事項に関し、協力者会議委員以外の学識経験者にも協力を求める。

４　実施期間

平成１３年４月１３日～平成１５年３月３１日

５　その他

この事業に係る庶務は初等中等教育局国際教育課において処理する。

資料

村田 栄一
(横浜市立金沢中学校)

小山さんの方から項目をいただきましたけれども、今年度は専任配置校ではない（国際教室のない）学校にいますので、国際教室の設置と運営は港中と上飯田中のことを簡単に報告して欲しいと言われましたので、書きました。

■全校的な取り組みが必要だ!

まず、港中と上飯田中のことを簡単に話していきます。

港中の国際教室は１９８４年に帰国子女の専任配置校ということで指定を受けまして、私は１９８６年にメキシコから帰ってきて入っています。それ以来現在まで国際教室はずっと設置されています。帰国、外国人生徒教育の研究指定を横浜市、神奈川県、文部科学省から受けて研究を進めていました。ただ、文部科学省の指定は、私が上飯田に移った年で辞退したので、現在は受けていません。校務分掌のなかに帰国・外国人生徒教育係というのと、帰国・外国人生徒教育担当者会っていうのを設置して、全教職員でとりくむ体制をつくりました。帰国・外国人生徒教育の場としての国際教室は、日常的なもののほかに、選択教科のなかに日本語という項目をもうけて２，３年生に週２時間ずつ。これは外国人生徒教育の専任が担当するという形で進めました。中国語教室ということで、年間２０時間という限定で、引揚者の方ですけども、卒業生のお父さんが中国で２０数年間小学校の教員をやってこられたということがあったものですから、お願いして、会社の休みの木曜日に中国語教室という形で開いてました。それから夏休みに日本語教室という形で１０日間、専任と非常勤でしました。

■地域との連携の大切さ

教材整備の委員会にかかわることですけれども、全体のことにかんしてお話しさせていただきます。まず、対象は帰国・外国人生徒ということですが、帰国というのは、日本国籍でご両親が海外に仕事で行っていて日本に帰ってきたという「帰国」ではなくて、港中の場合には、いわゆる中国帰国生徒です。いわゆる引揚げた方の家族ということです。日本語指導および教科の補完指導を必要とする帰国・外国人生徒を対象にしました。指導時間は週２２時間、生徒の状況により、２時間から１２時間といろいろあります。指導場所は国際教室。初めの５年間は保健相談室を兼用してましたけど、空き教室がでたので、そこを国際教室に改善してそこを使いました。指導者は、帰国生徒教育専任教諭が２名、帰国・外国人生徒教育担当、これは全校で取り組むために、その年度に教科時間数の少ない教員を中心にして国際教室に直接担当していただくという形で４名入ってもらいましたが、年度によって人数には差があります。いまは日本語指導協力者という名前になっていますが、当時は非常勤講師という名前で、市教委から中国人の方が派遣されてきていました。それから先ほどお話した中国語指導のボランティアが１名です。

■港中学で使った教材

指導内容は日本語の基礎学習、教科学習。おもに国語、社会、数学、理科の４教科。それから中国語と生活適応。指導教材としてはレジュメ（資料参照）に挙げましたような教材を使っていました。このなかでは日本語がまったくわからない中国から来たばかりという生徒には、「先生おはようございます」（文部科学省）というようなテープでほとんど中国語で、ところどころに日本語が入っているという教材です。それと光村と中国の人民出版とで共同でつくりました「初級標準日本語」は全部中国語で、テープもあります。それを使いました。しばらくしたら、その後の「ひらがな練習帳」「カタカナ練習帳」「日本語かな入門」「ひろこさんのたのしいにほんご」。これは生徒の状況によって使い分けていました。

漢字が学習できる段階になった生徒に対しては、中国人ですので漢字はできるんですけれども、日本語の漢字と色々な面でずいぶん違う面もありますので、「Let's learn Nihongo」という、パソコンのソフトで、初歩の漢字のつくりや象形文字のつくりなどが学習できるし、書く練習もできる、そういう教材です。この場合には、一人でも練習できましたので、たくさん利用してました。

それから愛知県の中学校（南部中学校）の青木さんという先生が個人で開発された「日本語学

習ソフト」というのがありました。これはソフトだけじゃなくて、ものすごい量の、積み上げれば１メートルくらいになるくらいの、教材・ワークシートを、この先生自分でおつくりになってるんです。それを全部送ってもらいました。これも生徒が個別学習できますので大いに使っていました。点数が１０００点になると、自動車の障害物がいろいろあるこの先生がつくられた簡単なゲームができるようになっているのですが、そのゲームをやりたいために一所懸命学習していた生徒もいました。

教科の方では、「Thinkリード」、これもソフトなんですけれども、カテナで作っている理科と数学の教材です。それから国研から上越大学に行った藤田先生がつくられた「中学理科１分野」「２分野」の翻訳本も利用していました。あとは、マンガで日本とか中国とか世界の歴史を書いてある本を利用したりしていました。それから中国語に関しては、先ほどお話ししたボランティアの方が中国で使われている小学校５年生の国語教科書を送ってもらいそれを使いました。

■港中学をめぐる状況

以上が港中学校ですけども、港中学校は上飯田中とだいたい同じなんですけど、場所によって児童生徒の国籍が集中しているところもたくさんあります。港中の場合は場所柄中国人の生徒が９割近くでしたが、外国人の方が沢山住んでいるところがありましたので、ノルウェーとかアメリカとか韓国とかいろんな国の外国人生徒も入っておりました。中国といいましても港中の場合はいわゆる引揚者の生徒はほんのわずかです。中国籍の生徒が６、７０名いると、大体１５、６名が引揚者。中国人全体では半分が大陸出身、半分が台湾出身でした。大陸のほうでも、いわゆる出稼ぎで中華街に来ている人がほとんどで、国費で引揚げてこられた方は毎年１名いるかなという程度です。

上飯田中学校のほうですけど、簡単にいきます。国際教室の設置は港中より遅くて昭和６２年、１９８７年に同じような専任配置校として指定を受けて、どういう訳か私が港中から上飯田中に移った年度だけ指定が外れてしまったんですね。５、６０名くらい外国人生徒がいたんですけど、何故か外れてしまって行ったらないということで大騒ぎして校長と２人で１年間作れ作れと委員会に言いっぱなしで、次の年また復活しましたけど、その年だけ外れました。現在まで続いています。港中と同じように校務分掌の中で位置付けて全教職員で取り組む体制を作っています。今港中にいる前任の先生が全校の先生方でやろうということで、港中と同じように多いときは１０名くらいが１年間で大体１、２時間づつ担当しました。ただ昨年度全国発表があった関係で、昨年度と今年度と専任だけの体制になってしまっています。指導時間は６８時間と書いてありますけど、これは１人では到底持てないわけで、３人で６８時間という意味です。指導場所は国際教室別棟とありますけど、上飯田中の場合は４棟ありまして、１年２年３年とそれぞれ一つずつの独立棟になっていて、あともう一つの棟があり、そこに国際教室があります。指導者は外国人生徒教育担当教員が３名です。今年度も３名です。昨年度は３名で４０人の生徒を指導するのが無理なのでボランティアの方にお願いして学校に入っていただいて、週１、２時間なんですけど８名の方、主婦、大学院生、大学生、いろいろ来られてやっております。今年も何名か引き続きやっていただいているようです。

■上飯田中で使った教材

指導内容は港中と同じようなものです。指導教材としては中学生ということと、教科にすぐ結びつく教材ということで、「文化初級日本語」というものを沢山利用しました。それがほとんどだと思います。あと沢山いますので、昨年度でも４１名いましたので、聴覚教材とか機器教材を利用して個別指導しました。

■「教材をつくる」取り組み

資料リスト１～７まで項目立てしましたけど、これは私が使っていた教材ではなくて、現在横浜市には国際教室のある中学校が１０校あります。その１０校の専任の先生たちにＦＡＸでお願いして、中心に使っている教材等を書き出してほしいとお願いしました。ほんとうは、これだけではなくて、内容等抜けてるところもありますけども、横浜市の中学校ではこういうような教材で今１０校の国際教室が運営されているということです。

■教材整備をめぐる二つの状況

最後の所４ページ。簡単に思いつくままそこにいくつか項目挙げました。教材整備する上で２通りあると思うんですけど、国際教室が設置されていて人数は少ないけれども専任の担当者がいて指導できる、そういう体制を取っているところ、これは県内でも少ないと思います。国際教室のない学校が大変多いのではないでしょうか。そういうところに対する手だてというのも必要だし、国際教室が設置されている学校でも、担当者が毎年変わる学校が多いようです。初めて担当して何やっていいか分からない。前の人のを見て、それを見よう見まねで進めていって、やっと１年終わってようやく覚えたところに、また次の年度は他の先生が入って来るという形がたくさんあります。、国際教室があったとしても、初めて担当した指導者が利用できるような教材というのは必要じゃないかと思います。

■教科学習の教材の蓄積が薄い

中学校に限ってお話しさせていただければ、中学校の場合３年間しかなくて、１年で入ったとしても、３年で卒業することになります。しかも小学校にはない「進路」という大きな問題があります。今はほとんど１００人が１００人進学を希望する状況にあります。そういう状況の中で、教科学習の向上に結びつくような日本語教材というものが準備、整備される必要があるのではないでしょうか。

先ほどお話ししましたように、専任が全くいない学校、いても児童・生徒数が多かったりする学校。そういうところには個別学習用の教材が大変有効だと思います。そういう意味ではコンピューターソフトのような教材が整備される必要があるのではないでしょうか。また、社会とか理科とか教科学習のなかで、日本語が難しいということで多くの児童・生徒戸惑ってしまいますので、母語解説付きの教材が必要だと思います。これはいま、いろんな所で作っていますけど、まだまだ少ないので、今後、整備していく必要があるのではないかと思います。

■関係の網の目を!

教材ではないんですけれど、なんらかの施設ができるなどして、先進校の実践をすぐ見学できるような環境作りがあったらいいなと思います。併せて、この検討委員会がはじまったときに金子先生のお話で小山さんたちに作っていただいた情報網（メーリングリスト）が立ち上がっているんですけれど、こういう関係の情報網も必要だと思います。学校だけではなくて、県内のボランティアのいろいろな教室も含めた情報網が作成されていると非常に有効に使えるのではないかと思います。

資料リスト

① 外国人生徒受け入れに関するもの

資　料　名	発行元	内容（簡単に）
外国人児童生徒のための日本語指導	ぎょうせい	日本語力評価試験
生活ハンドブック	幼い難民を考える会	
いっしょに学ぼう	神奈川県教育委員会	
楽しい学校	大和市教育委員会	はじめの十日間のために　ベトナム　カンボジア　ラオス
楽しい学校	大和市教育委員会	教科　ベトナム　カンボジア　ラオス
ようこそ日本の学校へ	文部科学省	
生活日本語	文化庁	中国帰国者のための
日本人の生活と習慣	アジア福祉教育財団	

② 国際教室運営に関するもの

資　料　名	発　行　元	内容（簡単に）
日本語の教え方	アルク社	国際教室取り出し指導
日本語の教え方の秘訣	ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ	
日本語教師分野別マスターシリーズ	アルク社	音声指導、文法指導、日本語教授法
日本語文法ハンドブック	ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ	
世界にひらく心	横浜市教育委員会	国際教室設置校実践報告書
外国人子女の日本語指導に関する調査研究・最終報告書	東京外国語大学	
中国帰国者定着促進センター紀要５	中国帰国者定着促進センター	中国帰国児童生徒教育実践事例

③ 外国人生徒教育カリキュラムに関するもの

資　料　名	発行元	内容（簡単に）
たのしいにほんご	横浜市教育委員会	
外国人児童生徒のための日本語指導	ぎょうせい	カリキュラム、ガイドライン、評価
公文式の漢字カード	くもん	
にほんごをまなぼう	ぎょうせい	
にほんごワークブック	凡人社	
ひろこさんのたのしいにほんご	凡人社	

資料

資料リスト
④　外国人生徒指導教材（日本語・各教科・その他）

教　材　名	発行元	内容（簡単に）
ひろこさんのたのしいにほんごⅠⅡ	凡人社	日本語基礎学習
同上　ひらがな・かたかな・かんじ れんしゅうちょう	凡人社	平仮名・片仮名・漢字の基礎練習
同上　ぶんけいれんしゅうちょう	凡人社	日本語基本文型の練習
にほんごだいすき　テキスト	むぎ書房	日本語基礎学習
同上　　ワークブック	むぎ書房	
同上　　れんごのほん	むぎ書房	
日本語初歩	国際交流基金	日本語基礎学習
同上　練習帳	国際交流基金	
同上　漢字練習帳１．２	国際交流基金	
ひらがな練習帳１．２．３	中国残留孤児援護基金	ひらがな基礎学習及び練習
カタカナ練習帳１．２．３	中国残留孤児援護基金	カタカナ基礎学習及び練習
文化初級日本語ⅠⅡ	凡人社	日本語基礎学習
同上　楽しく聞こうⅠⅡ	凡人社	「聞く」ことの練習
同上　楽しく読もうⅠⅡ	凡人社	「読む」ことの練習
同上　楽しく話そうⅠⅡ	凡人社	「話す」ことの練習
同上　練習帳ⅠⅡ	凡人社	基本文型の練習
標準日本語　初級・中級・上級	光村図書	中国語による日本語学習
しんにほんごきそⅠⅡ	ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ	日本語基礎学習
同上　かな練習帳	ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ	仮名練習
日本語かな入門	国際交流基金	平仮名、片仮名基礎学習
くもん小学ドリル	くもん	
学年別漢字習熟プリント	清風堂書店	漢字練習
中国人のための漢字の読み方	ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ	漢字練習
たれからだれに	グループイレブン	「やり」、「もらい」表現等の練習　ワークシート
英語単語リスト	潮田中	
小学校の算数　数と計算　対訳集	川崎市総合教育センター	６カ国語対訳集　インターネットでダウンロード
社会科　地理、歴史、政治、経済	大阪府在日外国人教師研	中国語翻訳本
英語　NEW CROWN2 NEW HORIZON3 NEW CROWN1	大阪府在日外国人教師研究協議会	英語教科書翻訳（中国語）

資料

教　具　名	発行元	内容（簡単に）
理科　初中理科中日対訳	大阪府在日外国人教師研	理科教科書翻訳（中国語）
社会　世界のれきし　日本のれきし	大阪府教育委員会	歴史の翻訳（数カ国語）
はじめくんとまりちゃんのにほんごきょうしつ１・２・３	大宮市立教育研究所	日本語基礎学習　インターネットでダウンロード
外国人児童生徒のための日本語指導	中国帰国者定着促進センター	４分冊
児童のための教材集	武蔵野市教育委員会	
算数文章題に使われる表現例集	武蔵野市教育委員会	１年生から６年生までの表現
おはなしのつづき	武蔵野市教育委員会	
ことばさがし	武蔵野市教育委員会	
数の聞き取り	武蔵野市教育委員会	
こんにちは	大阪府教育委員会	
日本語初期指導のためのひらがな・カタカナ練習	前橋市	
わたしのにほんご	東京都目黒区	
にほんごドリル	甲府市	
たのしいにほんご	東京都江戸川区	
復習日本語	大阪市	
日本語会話教本	東京都世田谷区	
日本語練習問題集	東京都世田谷区	
やさしいにほんご	東京都世田谷区	
ことばのリスト	東京都世田谷区	
チャート集	東京都世田谷区	
日本語テキスト	川口市教育委員会	
日本語の学習	東京都足立区教育委員会	
ともだちといっしょに	堺市教育委員会	
たのしいがっこう	東京都教育委員会	
こんにちは　にほんご	奈良県教育委員会	
にほんごでまなぶ　こくごとさんすう	埼玉県教育委員会	
せんせいおはようございます	文部科学省	中国語　中国帰国孤児子女のための日本語教材
にほんごをまなぼう１・２・３	文部科学省	
たのしい理科（５年生） 中学校理科１分野上下、２分野上下	上越大学教授 藤田正春	中国語を母語とする日本語学習者のための教材

資料

⑤　外国人生徒指導教具（日本語・各教科・その他）

教　具　名	発行元	内容（簡単に）
携帯用絵教材	ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ	名詞、動詞、形容詞、会話表現
あうんでいこう	ジャパンライム	ビデオ
日中辞典	小学館	
中日辞典	小学館	
日越小辞典	大学書林	
日本・カンボジア語辞典	めこん	
ｊ・北京２０００ TWIN	KODENSHA	日中翻訳 CD-ROM
おしゃべりあいうえお	トミー	
ひらがなカード	すずき出版	
カタカナカード	すずき出版	
日本語カルタ	凡人社	
くもんの幼児図鑑カード（動物）	くもん出版	
くもんの幼児図鑑カード（果物）	くもん出版	
くもんの幼児図鑑カード（こよみ）	くもん出版	
くもんの反対語カード	くもん出版	
くもんの四字熟語カード	くもん出版	
くもん式の漢字カード	くもん出版	
あいうえおかるた	絵本館	

⑥　パソコン、インターネット教材

教　材　名	発行元	内容（簡単に）
マルチメディア「にほんごをまなぼう」	文部科学省	初期日本語指導教材 CD-ROM 及びインターネット
Let' Learn Nihongo	セイコーシステム	漢字（読み・書き）基礎学習
Think リード学習システム	カテナ	数学・理科の領域別学習
アニメ中学理科	アドウィン	
マイ代数レッスン	データホップ	単元別
スマイルタウン	がくげい	英語基礎学習
言葉図鑑	NEC インターチャンネル	
漢字ワールド	日本漢字能力検定協会	
算数戦士プラスター２	SSI トリスター	足し算・引き算基礎練習
外国籍生徒のための日本語学習ソフト	南部中学校青木健司	

資料

⑦　その他、外国人生徒教育に関するもの（国際理解教育関係も含む）

資　料　名	発行元	内容（簡単に）
学校からの通信連絡文	潮田中学校	スペイン語、ポルトガル語
在学証明書、履修証明書	潮田中学校	スペイン語、ポルトガル語
日系南米人の子どもの母語教育	KOBE外国人支援ネット	
アジアと出会う本	国土社	
韓国、朝鮮と出会う本	国土社	
ヒット曲で覚えるアジアの言葉	雷鳥社	
学校用語集	川崎市総合教育センター	中国語
学校用語対訳集Ⅰ	横浜市帰国子女教育研	英語、仏語、独語、西語、中国語、カンボジア語
同上Ⅱ　家庭への通知文	横浜市帰国子女教育研	

村井 典子
(横浜市立下野谷小学校)

■下野谷小では・・・

まず本校の国際教室の設置運営状況ですが、外国籍児童が資料に書かれてあるように３１名通ってきています。日本語指導の必要な児童はその中で１４人ということで、この生徒達が国際教室に通級しています。本校は専任は私１人で、週２５時間を受け持っています。児童１名に対して大体週２時間から多い子で６時間割り当てて指導しています。時間割は年度当初に担任と相談して主に国語の時間をその子の通級の時間ということにしています。本年度の取り組みを中心に書いたのですが、私は５年前から専任になり、途中１年間だけ担任に戻りました。今は９月１０月に入ってきた２名の韓国人児童と中国人児童がまったく日本語が分からない状態なので、その子どもたちの時間割を新たに組み込んで重点的に日本語指導を行っています。それ以外の子ども達はほとんど日本生まれとか日本育ちなので、日常会話には特に支障がない状態で、日本語指導というよりも国語科の補習という形を取って取り組んでいます。

■国際教室が発信する「多文化共生教育」

本校独自の取り組みとして４年前からやっているのですが、人権教育や多文化共生教育の一環ということを考えて、国際教室がそういうものの発信基地になっていったらいいんじゃないか、という考えのもとで“アミーゴスタイム”というものをやっています。これは教材教具とは直接には関係ないのですが、間接的には関わると思って資料に書きました。最初は外国人児童同士の横の繋がりを密にしようということで始めました。全校に対する多文化共生教育というところまで発展しないのではないかという反省から、本年度からは取り組みを全校に広げてやっています。具体的な活動は２０分休みに子ども達に呼び掛けて１回につき１つの国の文化（遊びとか踊りとか）をみんなで楽しもうという、本当に小さな取り組みなのですが、回を重ねて取り組んでいます。ここに書かれてあるようにマラカスを作ってブラジルのサンバを踊ろうとか韓国のじゃんけんで遊ぼうとか。あとで写真を回そうと思います。今度は実際に１月に鶴見区が主催する国際交流祭りに出る子がいるんですけど、その子に頼んでボリビアの踊りをしてもらうとか。そういうことを色々考えています。最初は私達教師側がある程度の形を作って始めていったものですが、これからは,子ども達が主体的に関われる部分を増やしたいと考えて、４年生以上の児童に呼び掛けて“アミーゴスリーダー”という名前の、会を運営する子ども達を募集しました。そして、その子たちが全校に参加を呼び掛けたり、当日は小さい子のお世話をしたりとかそういう風な形で開いています。

■教材 ・ 教具について。 おすすめは・・・

教室で収集している教材教具は資料に書かれてあるようなもので、５年間で色々試行錯誤して色々な先生からあれもいいこれもいいという風に聞いて集めてはみたけれど、やはり使いやすいもの、使いにくいものがあるなと思います。今全く日本語が話せない２人に対して一番いいと思っているものを使っています。それは一番上に書かれている凡人社から出ている「日本語学級１・２」ですが、これはとてもいいお勧め教材です。資料のなかの「移行期」というのは金子先生が“橋渡し”というようにおっしゃっていたまさにその時期の子どもたちと考えてください。完全に日本語話者で、家庭では父母の母語と日本語を交ぜて使っているくらいの子どもたちで日常会話は支障ないです。時期を問わない教材としてはここに書かれてあるようなゲーム的なもの、カルタとかカードとかビンゴなどですが、その他各種の辞典、単語帳など活用しています。

使用状況ですが、先ほど言った「日本語学級１」というのは財団法人波多野ファミリスクールの大蔵守久先生がスクールでずっと行ってきた指導の中で、自ら開発された教材をもとに作られたテキストです。私も県教育委員会主催の研修会の時に訪ねたことがあって、実際にもとの教材を目にしたんですが、本当に大蔵先生の素晴らしい才能にみんな魅せられてしまうんです。直感で理解させるための、自ら描かれたイラストというのがものすごく上手で、いつか出版して欲しいという声が高まって出版にこぎつけた本だということです。非常にユーモア溢れる楽しい内容でありながら、なおかつとても系統立てて全く話せない子でも楽しく、知らず知ら

ずのうちに日本語に慣れ親しんでいくような作りになっていますので、これを使っています。もう一つの教材としては漢字のテキストですが、豊岡日本語教室の先生から教えていただいたテキストで、１冊で１年から６年までの漢字を網羅してあるもので、自学自習もできる形になっていますので使っています。移行期児童は国語の進度に合わせて国語の補強ということに力を入れているので、例えば今２年生だったら「スーホの白い馬」の音読をしたり、カードを使って詰めこみにならないような漢字学習をしたり、楽しみながらできるように工夫しています。

■初期指導の工夫

課題ですが、初期指導の教材は沢山のテキストが小学校のものでも並んでいます。中学校もそうだと思うんですけど、どれを取ったとしても日本語が全く分からないときに、「書いてごらん」とか「読んでごらん」っていう一言でも説明に苦労して中国語辞典を取り出してといったように、ロスタイムが生じます。私もスペイン語もポルトガル語も中国語も韓国語も全部話せないから、その時入ってきた子どもの母語を自分で調べながらやらなくてはいけない。その時に簡単な“書いて”とか“読んで”とか“面白かった？”とか“分かった？”とか頻繁に口にする言葉は母語で壁に貼っているんですけど、そういうことをして時間のロスを減らすといいなと思います。横浜市では教育委員会に連絡するとすぐに、対訳を送ってくださるので活用させていただいています。

日本語以外の教科（算数、社会、理科）については子どもにとっては来た時点からストップの状態になってしまうという問題点は中学でもおっしゃってましたけど大きいと思います。本来だったらカリフォルニア州などで行われていたように、二言語教育が行われて、ある教科についてはその子の母語を使って母語の堪能な先生が教えることができれば、理想的です。そうすればある日突然編入してきたとしても教科の中の漏れというか、あることは教わってないという状態が少しでも起きないような状態に近づくことができるんだけど、横浜だけでなく日本の現状はそういう状態ではないので、その子の一生を考えた時にはものすごい課題なのではないかと考えています。

■教材はつくったけれど・・・

パソコン教材については鶴見区は６校国際教室がありまして、全部について問い合わせて聞いたんですけど、文部科学省が配布してくれた「マルチメディアにほんごをまなぼう」を６校とも全部使っていないという状況でした。理由まで詳しくは聞けなかったのですが、聞けた先生の中では、使い方がよく分からないという声もありました。市販のソフトを使っているというところは１校ありました。パソコンの活用というのは村田先生もおっしゃったように、これがスムーズに行われるようになれば、１人１人が自学自習ということでどんどん進めることができると思います。指導者数の少なさをカバーしてくれる有力な教材教具なので、作る側と使う側が緊密に連絡しあった方がいいと思います。作ったはいいけれど、どれくらい活用されているのかなかなか調べるのが困難になっていると聞いていますので、ここのところをもうちょっと工夫できたらいいなと思います。

■手作り教材と経験の共有

手作り教材はどの学校でもたくさん作っていると思うのですが、それを実際交換し合う機会がほとんどないと思います。とてももったいないことなので、そういう機会を是非作りたいと思います。今回の計画の中にもそういうものまで将来的に盛り込めればベストです。情報の分類整理の考え方としては、宿題としていただいた所に書かれてあることと全く同じです。初めて国際教室の担当になったとき何をしていいか分からないという声が度々色々な担当会で聞かれて、本年度のいちょう小で行った担当会では泣いてしまった人までいて、当人にとってみたら本当に大変なことだと思います。自分も経験したので少しでも経験を積んだ者のノウハウをまとめてマニュアル化して、冊子にしたりインターネットで検索できるようにしたりしたい。いつ自分がなっても、今まで経験がなくても、何とかイメージが持てるというか、そういうものができたら本当に素晴らしい。補習教室についても、民間やＮＧＯ、ＮＰＯの教室ともリンクできれば、そういうところでも独自教材が多分開発されていると思うので、情報量が増えていいことずくめじゃないかなと思う。是非そういうことのために私も力になれたらなと思います。

2001．12．18

国際教室事例報告

横浜市立下野谷小学校
国際教室　村井典子

1．国際教室の設置・運営状況

①外国籍（及び二重国籍）児童在籍状況

・ブラジル　１１人
・ペルー　　８人
・ボリビア　　５人
・韓国　　５人
・中国　　２人　　合計　３１人

②国際教室通級児童

・１年生　４人（ブラジル）
・２年生　４人（ブラジル・ペルー）
・３年生　２人（ブラジル・ペルー）
・４年生　１人（韓国）
・６年生　３人（ペルー・ボリビア・中国）　　合計　１４人

③運営状況

本校では１名の専任が担当し、児童１名に対して週２～６時間を割り当てて指導している。時間割は、在籍級の担任と相談し主に国語の時間に通級するように、年度始めに決めている。従って、多いときには４～５名の学年の異なる児童が一緒に学んでいる。

来日後間もない２名の韓国人児童と中国人児童にはひらがな及び初期必修の語彙指導をほぼ毎日行い、その他の日本語話者児童に対しては、国語科の補強（音読、漢字、作文、読解）を中心にして時に応じて算数の補強も行っている。

本校独自の取り組みとして、人権教育・多文化共生教育の一環として４年前から「アミーゴス・タイム２００１」という名の活動を行っている。これは、当初外国籍児童同士のつながりを深め自文化への誇りを持たせる目的で始められたが、本年度は全校児童を対象にした活動へ発展させた。その理由としては、外国籍児童だけが集まる活動では、全校児童を巻き込めず、本来の多文化共生教育の理念に近づくには対象を全校に広げる必要性を感じたためである。具体的には、一つの国をテーマにしてその国の文化（遊び、音楽、踊り、工芸など）に親しむ時間を２学期から１ヶ月おきに４～５日間の休み時間に設定し、全校児童に参加を呼びかけている。３学期は毎月実施する予定である。内容は、「マラカスを作ってブラジルのサンバを踊ろう」「韓国のじゃんけんで遊ぼう」「ボリビアの踊りを楽しもう」「中国の切り紙細工を作ろう」「ペルーのけんぱーで遊ぼう」などである。毎回４年生以上の有志児

資料

童「アミーゴス　リーダー」達が活動を支え、テーマの国とつながる児童が活躍できる場面を設けるようにしている。また、活動の様子を国際教室だより「アミーゴス・タイムズ」に載せて全校に知らせることを考えている。

2．教室で収集している教材・教具

①初期指導教材

・日本語学級１　初期必修の語彙と文字（凡人社）
・日本語学級２　基本文型の徹底整理　（凡人社）
・学校生活にほんごワークブック（凡人社）
・にほんごをまなぼう（文部省）
・にほんごだいすき１　テキスト、たんごのほん、ワークブック（むぎ書房）
・にほんごだいすき２　テキスト、ワークブック（むぎ書房）
・ひろこさんのたのしいにほんご（凡人社）
　１ぶんけいれんしゅうちょう
　１ひらがな・かたかな・かんじれんしゅうちょう
　２かんじ・ぶんけいれんしゅうちょう
・日本語かな入門ポルトガル語・スペイン語版（国際交流基金日本語国際センター）
・くもんの小学ドリル（公文出版）
・確かめて正しく覚える漢字の練習（光文書院）
・小学校の算数＝数と計算・対訳集＝（川崎市総合教育センター）
・マルチメディア「にほんごをまなぼう」（文部科学省）」

②移行期指導教材

・国語教科書
・手作り教材（漢字カード、漢字ビンゴ、漢字すごろく、実物教材など）
・パソコン教材「漢字マスター小学１～６年」（パル教育システム）
　「国語マジック」（東大英数理教室）
　「こくごレンジャー」（ｔｄｋ）
　「漢字大サーカス・消えたライオンをさがせ」（日本漢字能力検定協会）

③時期を問わない教材

・ひらがなカルタ、カタカナカルタ、漢字カルタ、部首カルタ（太郎次郎社）
・おもしろい漢字カード１～４（アプリコット）
・あいうえおばけかるた（絵本館）
・漢字がたのしくなる本（太郎次郎社）
・シート式あわせ漢字ビンゴゲーム（太郎次郎社）
・ことばつかいかた絵じてん（三省堂）
・子どものための５カ国絵単語帳「これってなに？」（チャレンジ日本委員会）
・子どものための６カ国絵単語帳「どこいくの？」（チャレンジ日本委員会）

3．教材・教具の使用状況

本年度は年度途中で韓国語話者一人と中国語話者一人が入級し，この二人には「日本語学級１」を用意して取り組ませた。ひらがなとかたかなを一通り習得させた後に「確かめて正しく覚える漢字の練習」を使って１年生の漢字から始めて２年生のレベルまできたところである。

「日本語学級１　初期必修の語彙と文字」は財団法人・波多野ファミリースクールの大蔵守久先生が文部省の委嘱を受け，スクールで行ってきた外国人児童生徒に対する日本語指導で，自ら開発された教材を一般に向けて出版したものである。このテキストは小・中学生に一日も早く日本語での意志疎通を可能にさせるために作られており，直感で理解させるために１０００以上のイラストを使って言葉の説明がなされている。また，愉快な場面設定を取り入れて，授業が楽しく進められるように工夫されてある。本学級の二人の児童もユーモアあふれるイラストには笑い声をあげ，喜んで取り組んでいる。二人で役割演技をして語彙をふやしたり会話の練習をしたりできるので，その点も優れている。このテキストの終了後は「日本語学級２　基本文型の徹底整理」に進むことになっている。韓国人児童の方は，母親がかなり日本語を話せることもあり，９月の入級時期に比べて会話の面で格段の進歩が見られる。約１ヶ月遅れて入級した中国人児童も役割演技の中で上手に日本語が言えるようになった。

漢字のテキストは，１冊で１年生から６年生までの漢字を網羅してあり，１ページごとにテストの形をしているが，自分で漢字をさがせるようになっているので，学習のプロセスを覚えれば一人でも取り組めるものである。児童は，初めに下の段の漢字の中から「読み」を見て適切なものを選び出し，その際筆順についても確かめて□の中に書き入れていく。漢字の意味については，中国語辞典，韓国語辞典で調べて子どもたちに教えている。

移行期児童は，学校生活においては全員が日本語を使い，家庭においては保護者の母語と日本語を混ぜて使っているものがほとんどである。これらの児童に対しては，それぞれの学年の国語の進度に合わせて，音読，文字，作文を中心に取り組み、国語科教科書を活用している。また、単調になりがちな漢字学習は少しでも楽しい要素を取り入れるために、手作りの漢字カードやビンゴ、すごろくなどを活用しゲーム化するなどの工夫をしている。

時期を問わない教材は、必要に応じて活用し役立てている。

4．日本語指導、教科指導等を行う上での課題

初期指導に適した教材は、かなりの種類が出そろっているので、児童の実態に合わせて選びやすくなってきたが、日本語が全くわからない児童が課題にとりくむときには、初めは母語による指示や質問を行うことが望ましい。というのは、日本語で言われても何をしたらよいかわからず、時間を無駄にすることが多いためである。指導者は「書いて」「読んで」「見て」「わかりましたか」などの頻繁に使う言葉の母語を調べて使うことによって、児童にも親近感を与えることができ、時間も有効に使うことができる。本市では日常会話の場面ごとの簡単な対訳を，教育委員会にお願いするとすぐに送付してもらえるので大変助かっている。

教科指導が母語で行えれば、各教科の指導内容にもれがないようにすることもできるが、現在はそのための人的な整備はないのでどうしても教科内容すべてを教えることはできない。（カリフォルニア州では２言語教育が長く行われていたが最近その是非を巡って州民投票では反対が上回る事態も起きている。）

パソコン教材については，鶴見区６校の国際教室における活用状況を調べたところ文部科学省の配布した「マルチメディアにほんごをまなぼう」は６校ではまだ使われていない。市販のソフトを活用しているところは１校あった。パソコンの活用については今後一層望まれると思うので，作る側と使う側のさらに緊密な連携を図って行くことが求められるだろう。

手作りの教材は日々の指導では欠かせないものであり，どの学校でも作られていると思われるが，他校の実例を見たり，お互いに情報交換し合う機会がほとんどないので，もったいない面がある。さらに充実させるためには，そのような機会を是非作りたいと思う。

５．情報を分類・整理するための考え方

初めて国際教室の担当になると，誰もがどのように教室経営を行えばよいかわからず悩むものである。試行錯誤を繰り返して自分流のスタイルが定まるまでにはかなり時間がかかる。担当者会などでよく聞かれる話である。そこで，経験の長い担当者たちが蓄積したノウハウをひとつにまとめて，「国際教室の経営マニュアル」のようなものが作られるととても役立つと思う。未経験でもあまり不安に思わず担当できるようなつぼを押さえた，ヒントの多いものが望ましい。そして，それもホームページなどで情報の共有化ができればさらに理想的であろう。

また，補習教室などのリストなどをそのマニュアルに付加することは，国際教室と補習教室との連携や情報交換，教材紹介などがこれまで以上に活発化されることにつながるので，是非考えていきたいことである。

黒坂 陽子
(横須賀市立浦郷小学校)

■横須賀市の状況

横須賀は小学校１校、中学校１校国際教室が設置されています。横浜に一番近い北部の追浜地区で南米からの方が増えてきました。その外国人労働者の子どもたちが入学してきて、小学校３校に中学校１校という形で中学校区があるんですけど、この中の一つ、浦郷小学校に国際教室があります。その３校の子どもたちが追浜中学校に行くのですが、追浜中学校にも国際教室が設置されています。通級というのは横須賀ではやっていないので、浦郷小学校の子だけ国際教室に来ています。

在籍の状況ですけど、１５人の子どもがいます。最初はブラジルとかペルーとか南米の子が多かったのですが、最近は、もちろんアジアが中心ですが、多国籍化しています。

日本語指導員は横須賀の場合、派遣されてきます。６ヶ国語の対応で、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、今年度から韓国語、ロシア語の方が入られて、１０人いらっしゃいます。派遣が長期化してきまして、子どもの数が少なくなってきたということもあって、希望すれば割と来てくださって、一番新しく来たブラジル人の６年生の男の子には週１回ポルトガル語の日本語指導員の方に来ていただいています。

■初期指導対象の子どもは少なくなった

私は担当で「取り出し」授業をやっています。１週間に一番多く来る子は、２学期までは５時間だったんですけど、９月からブラジルに一度帰国した子どもたちが、また帰ってきまして、その子たちの抜けてる部分をもう一回ということで、今まで５時間だったのを３時間に減らして、ブラジルからの子に２時間という形でやっています。一番多い子は週３時間やっています。日本語指導というより教科の補習的なところが多くて、漢字をやったり、算数の分からないところをやったり、そういう指導のほうが多いような状態です。

国際教室は最初南米の子が多かったので、母語で話す交流もよくやっていたようです。最近はそういう意味合いは薄れましたが、学期に２回程度子どもたちが集まって交流を深めるということで給食会食をやっています。

■総合的な学習や人権教育、国際理解教育とのつながり

児童活動など全校行事で各クラスが出し物をやるときに、国際教室では世界の遊びというのを毎年やってきました。今年は世界のお話し会ということで、出身国の民話とか童話とかを読み聞かせる会をやってみました。それを個人面談期間中の午後、放課後にも実施してましたが、クラスの日本人の友だちも来てお話を聞いていました。

夏休みの宿題についてはお家の方が意味も分からないし、すごい量の説明書が行くんですが、取り組みが大変だということで、夏休みに４年前からそういう手助けと、母語を勉強したいといっても普段機会がないので、そういうときにできたらということで、夏休みに１週間自由参加で宿題と母語学習を行っています。日本語指導員の方や、地域の外国人支援NGOの人がボランティアで来てくださいました。おもに横須賀国際交流協会にボランティアの派遣をお願いして、今年は大学生、若者に来てもらって、スペイン語とかポルトガル語を勉強した子もいます。

総合学習や人権教育の研究を校内でやっていますので、その一つの視点として国際教育をとりあげ、人権の研修や開発教育の研修をこれまで行っています。教科書の中の国際理解教育の教材も国際教室がなるべく関わって、今年は６年生の国語の学習の発展でアルゼンチンに移住した子どものおばあさんに来てもらってお聞きしました。

■教科補習の工夫は？

教材資料の活用ですが、先ほどお話しした通り、教科の補習がほとんどの子が多いです。来日して一番短い子が「日本語学級」の１と２を終えまして、あとはどうやって進めていったらいいか分からなかったんですが、日本語能力試験３級の項目を参考にして、他の本からそこに相当するようなものをコピーしたりとか自分で作ったりして、日本語指導をやっています。あとは算数や国語の教科書などもよく使っています。

最初慣れるまでは子どもたちもすごく静かに

座ってやっていても、段々慣れてくると遊んだりあまり集中しなくなりますが、できるだけ動きを取り入れています。日本語コミュニケーションゲームというのを日本語指導員の先生からご紹介いただいて、ゲームを取り入れたりパソコンを使ったりしてできるだけ飽きないように工夫しています。

指導法については月に１回日本語指導員の方の研修に参加しています。ほとんど浦郷小学校の国際教室でやっているので、私も一緒に指導法を勉強させてもらっています。教材についてはそこで情報交換をして日本語指導の方たちに書籍の予算が来てるんですが、そこから国際教室に共通で置いておくものというものをみんなで選定してそれを使わせてもらったりしています。

■原学級に居場所があることが大切だ

指導上の課題なんですけど、段々慣れてくるに従って、国際教室に来るよりは教室での授業のほうを子どもたちも受けたがりますが、私はそれでいいと思います。教室の中にきちんと自分の居場所があって、その中でクラスの一員として認められているということが大事なので、あとは学習面をどう補習するかというところが難しいところですけれど、まずはクラスの中で認められてその子の存在をきちんと受けとめてもらうのが一番大事だと思います。１，２年生の時は全然来なかったんですが、学年が進んで、教科補習のために国際教室での個別指導を新たに始めた子もいます。今は教育課程の授業時間内でやっていますけど、教科の補習の研究がこれから必要なのかなと思います。進路の問題であるとか、アイデンティティのことだとか、帰国のことも課題です。でもなかなか帰国の時期は分からないみたいで、１年後に帰る予定でもそうはいかなかったり、ずっといると言ってたのに突然帰ってみたり、突然帰ってきたりとか、親も分からないしそういうことが多いので子どもたち自身も不安の中に置かれています。あまりしつこく聞くのも悪いのでどうしようかと悩んでいます。

■教材の分類、　資料の整理をめぐって

教材の分類、整理するために、日本語指導員の方にご協力していただいて、１月の研修会でどういうふうに教材を分類整理したらいいかということの意見を出していただきました。浦郷小学校でずっと溜めてきた資料の整理の仕方というのを毎年日本語指導員の方に配ってたんですけど、前回港中の村田さんから出していただいたものを見ていただいて考えてもらいました。港中の方法はとても分かりやすいのでこれを基本に考えてみようということで、教材の整理分類の仕方のところの①～⑨までは港中のを基本に付け足したりしてみました。

①の受け入れに関するものというのは日本語指導員の先生達は初期の子を持つことが多いので受け入れた当初どうするかということが非常に重要なので、ここのところは充実したものにしてほしいということです。

②国際教室運営に関するものというのは港中にあったんですけど、はっきりどういう分野のものか分からなかったんですけど、多分ここのところは教授法とか言語学関係の資料とか研究集録だとか各地の国際教育とかそういう関係の情報があればいいのかなということです。

③カリキュラムに関するもので、横浜市のほうの日本語指導員をしている方もいらっしゃって、その方からもらった横浜市の指導員の方が作ったチェックリストなどがここに入るのかと思います。

④、⑤教材と教具というところが一番数が多くなると思います。

⑥パソコンソフト、インターネットその他教材対訳集、ここまで港中のものと同じです。
その他に、母国とか母語に関するものや、生活、進路に関するものがあってもいいんじゃないかということです。

④、⑤指導教材教具というのは一番数が揃うところだと思うんですけど、ただ並べていても分かりにくいということで、ここの整理をどうするかということが重要だと思います。小、中とか年齢別というのもあると思います。言語別、英語圏と非英語圏は違うとか、漢字圏と非漢字圏は違うんじゃないかという意見も出ました。日本語のレベル別というのもあると思います。指導の内容別、川崎はこういう風に分かれてたと思うんですが･･･。

チェックリストかカリキュラムを一つ決めて、そこにずっと合わせてやっていくというのもありましたが、色んな整理の仕方があるのでひと

つには決まりませんでした。

■双方向的で、 コメントがついていて、使い方がわかるような・・・

インターネット上ということなので、並んでいるものをただページをめくるように見ていくのではなくて、年代とか国籍とか日本語のレベルなどを入力するとその子にあった教材が出てくるというのがあるといいですね。

双方向のやりとりができるものもいいと思います。質問したら答えてもらえるというのは、難しいと思いますが、そういう機能があるといいという意見もありました。

また、教材に対するコメントは絶対付けた方がいいということも挙がりました。どんなふうに使えるかわかったほうがいいということです。浦郷小学校にあるものとか、日本語指導員の方が使ったものなどお勧めのものについては、次回２月に、コメントを付けてくるということになっています。

教材の所在が分かれば、購入するということだけではなくて、近いところにあれば借りることもこともできるということが大切だと思います。手作り教材を作ってる方が多いんですけど、それもどこかに保存して利用できるようになることを指摘する人もいました。大学の研究室等と連携するといいということで、施設利用とか資料の閲覧とかできるといいのではないか、などの意見が出ました。

浦郷小学校にある資料リストは毎年足しながら更新しています。教材だけではなくて、通知文なども、色々な地域のものを借りたり、日本語指導員の方が作ってくれたり、担当が辞書を引いて作ったり、苦労してやってきました。その後、２００１年４月横須賀市教委の方で翻訳文を作成し、全校に配布されました。すべての通知文がカバーされているわけではありませんが、保健関係などは市共通の健診のものなどはできています。

国際教室等における教材整備検討委員会資料

2002/01/22

横須賀市立浦郷小学校国際教室担当
黒坂陽子

1．設置・運営状況

①外国籍児童の状況(2002.1.22現在)

学年	人数	通級児童
1年	1人(2人)	0人
2年	2人	1人
3年	2人	2人
4年	3人	2人
5年	1人	0人
6年	6人	3人
合計	15人(2人)	8人

出身国	人数
ブラジル	5人(2人)
ペルー	2人
ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ	1人
中　国	3人
ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	1人
ベトナム	3人
合計	15人

滞日時	人数
日本生まれ	6人(2人)
幼児期	3人
1年生～	2人
2年生～	1人
3年生～	2人
4年生～	1人
5年生～	0人
6年生～	0人

滞日年数	人数
0～1年	0人
1～2年	0人
2～3年	1人
3～4年	3人
4～5年	3人
5～6年	0人
6～7年	0人
7年以上	8人(2人)

1993年の教室設置当初は南米の子どもたちが多かったが、現在は多国籍化している。

②運営状況

追浜地区の企業に就労する南米からの外国人居住者が増え、浦郷小学校へも外国籍児童の転入してきた。92年に横須賀市派遣の日本語指導員による取り出しの日本語指導が行われ、93年には国際教室が設置された。2001年度の取り出し授業の時間数は、週1時間～3時間で、日本語指導員が週1回、来日3年目ブラジル人児童の日本語指導および教科補習にあたっている。ほとんどの子どもが、日本語指導と言うより教科の補習的意味合いの学習をしている。

日本指導や学習以外の活動としては、学期2回程度の給食を持ち寄る「給食会食」があり、子どもたち同士の交流を深めてきた。教室設置当初は母語で話す機会として貴重な時間でもあったようだが、最近はそういうこともなくなっている。また、「ちびっ子まつり」とういう各教室で児童が計画実施する活動時に、国際教室でも国際理解的な内容の活動を行っている。また今年度は、個人面談期間中の放課後「世界のおはなし会」という名で、子どもたちや両親の母国の民話や童話を読み聞かせたが、本人だけでなくクラスの日本人の子どもたちも来て、お話が終わったあとも国際教室で遊ぶ時間がもてた。

子どもたちの学習支援・母語保障のための取り組みとしては、夏休み中1週間、自由参加だが、夏休みの宿題と母語学習を行っている。そのため市の国際交流協会にボランティアの派遣を依頼している。

総合学習や人権教育の研究・研修の観点の一つとして、国際教育がある。日本人の子どもたちばかりの時は当たり前と思っていたことも、外国人の子どもがいることで日常を振り返り、人権について考えるきっかけになることもある。様々な国籍の子どもたちが在籍することは、国際理解教育を進めるきっかけがつかみやすいといえる。教科書の中にも国際理解教育といえる教材がたくさんある。たとえば、6年国語「南へ帰る」の

登場人物である「セルジオ・アキオ・オーイワ」という日系ブラジル人青年の背景は、浦郷小学校にいる南米人の子どもたちやその家族の歴史と重なる。１学期には、実際に移民を経験した保護者の話を聞く学習が６年全体で取り組まれた。

２．教材・資料の活用

４年生の２学期末に来日した６年生のブラジル人児童の場合は、「日本語学級１」「同２」を終え、漢字や文法事項、読解、聴解、作文などの学習を様々なテキストを使って進めている。「日本語能力試験３級」の項目を参考に目標を設定し、「実践日本語シリーズ」や「学校生活にほんごワークブック」「絵入り日本語作文」など他の教材から項目ごとに必要な学習を抜き出している。教室での授業に会わせて、教科書を使って復習・予習も行っている。

言葉の理解には、「ポ日・日ポ辞典」具体物については一目でわかる「こどもことば絵じてん」「ことば使い方じてん」「ものの名前じてん」などをつくことが多い。また、座学ばかりでは飽きてしまうので、「日本語コミニュケーションゲーム」などを参考にゲームをしたり、すごろくやカード、地図、実物を使って体を動かしながらの学習も取り入れている。

他の来日３年以上の児童の場合は、国語教科書の漢字の読み仮名付けや、音読、簡単な読解、文法事項の学習、短作文、算数の補習、計算練習のドリルなど、教室での学習進度にできるだけ合わせて学習をしている。どの学習もできるだけいろいろな方法、媒体を使うことを心がけているが、子どもたちはパソコンを使いたがる。漢字は「教科書の漢字ナビ」というソフトの中のゲーム的な学習を中心に、それに合わせたプリントなども使っている。

浦郷小学校にある日本語指導用教材は、横須賀市日本語指導員（６カ国語、１０人）に毎年つけられる教材予算から購入したものも多い。それぞれの個人持ちと、浦郷小学校に置いて共通で使う教材が購入されるが、その選定は月１回の日本語指導員研修会で行われることが多い。研修会では、各学校での指導状況の情報交換や、指導方法についての研究が行われる。市販されている教材だけでなく、各指導員の先生方の手作りの教材・教具が発表されることも多く、浦郷小学校でも使わせてもらっている。

３．指導上の課題

どの子も自分の教室の中に居場所があり、クラスの一員としてなくてはならない存在であることがあたりまえであり、クラスで学習が保障されることが望ましいし、子どもたちも望んでいる。教室での授業を抜けてくることによるデメリットもあり、取り出し授業をどのように行っていくか今後十分検討していく必要があると思う。

現在浦郷小には、学校生活を送るためのコミュニケーション的な日本語指導を行う必要のある子どもはほとんどいない。しかし、高学年の学習で使われる用語の理解が、日本語でも母語でも困難という子どももいる。両方の言語がどちらも不十分なため、学習が進むに従ってわからなくなることが予想される子どももいる。子ども一人ひとりに応じた教材を用意するためにも、日本語の初期指導から、教科学習を理解するための日本語指導の研究が必要とされているのではないだろうか。

滞在の長期化・定住化に伴う、進路、子どもと保護者との意志疎通、母（国）語（文化）保障、アイデンティティの確立、進路、帰国後の生活など新たな課題も増えている。

4．教材を分類・整理するための考え方

1月の日本語指導員研修会で話し合ったこと

☆教材の整理・分類の仕方は、港中の方法を基本に考えてみた。

①外国人児童・生徒の受け入れに関するもの

・来日してすぐにどう対処するかが重要

・担任の負担を減らすための、連絡や通知の翻訳文

（持ち物、時間割、学校生活など）

・特に初期指導が必要な子どもに対応する教材のリストアップ

②国際教室運営に関するもの

・あいまいな分野でわかりにくいが、教授法や言語学関係の資料か？

・外国籍児童・生徒についての研究集録など

・各地の国際教室関係の資料

③外国人児童・生徒教育カリキュラムに関するもの

・たとえば横浜市のチェックリスト

・カリキュラム

④外国人児童・生徒指導教材（日本語・各教科・その他）

⑤外国人児童・生徒指導教具（日本語・各教科・その他）

⑥パソコンソフト・インターネット教材

⑦教材対訳集

⑧国際理解教育に関するもの

⑨その他（母国や母語に関するもの、生活・進路などに関するもの）

☆④⑤の指導教材・教具の整理をどのような基準で行うかむずかしい。

・「小・中」

・「言語別」（「英語圏・非英語圏」、「漢字圏・非漢字圏」という分け方もある）

・「日本語のレベル別」

・「指導の内容別」

・チェックリストやカリキュラムに合わせる

☆年令・国籍・レベルなどを入力すると、その子に合った教材がピックアップされるような機能があるといい。

☆掲示板等ネット上で、質問したり助言をしたり、双方向のやりとりができるといい。

☆教材に対する使用者のコメントはぜひつけてほしい。（次回の研修会までにこれまで使った教材の中でおすすめのもについて、コメントをつけてくる。）

☆教材の所在がわかれば、近いところに借りに行ける。

☆手作り教材についても、どこか公的な場所に保存し、利用できるようにする。

☆大学の研究室等、研究機関とも連携する。（施設利用や資料閲覧も？）

日本語指導及び国際理解教育に関する資料

2001.10.22
浦郷小国際教室

Ⅰ.日本語指導関係

①書　籍

・日本語教材リスト 2000～2001年版　（凡人社）
・教授法マニュアル　７０例　上　（　〃　）
・タスクによる楽しい日本語の読み　（専門教育出版）
・日本語基礎文型練習帳　（　〃　）
・実践日本語シリーズ１　擬声語・擬態語　（　〃　）
・日本語の基礎Ⅰ韓国語訳、ポルトガル語訳　（スリーエーネットワーク）
・日本語の基礎Ⅱ韓国語訳、ポルトガル語訳、英語訳　（　〃　）
・日本語作文　（　〃　）
・絵入り日本語作文入門　（　〃　）
・絵でマスターにほんご基礎文型　85　（凡人社）
・ひろこさんのたのしいにほんご１、文型練習帳　（　〃　）
・ひろこさんのたのしいにほんご２、漢字・文型練習帳　（　〃　）
・学校生活　にほんごワークブック　【高学年児童，中学生用】　（　〃　）
・日本語学級Ⅰ、Ⅱ　（波多野ファミリースクール）
・日本語誤用例文小辞典　（凡人社）
・日本語能力試験対策　１級～４級問題集　（　〃　）
　上記　聴解テスト練習用カセットテープ　（　〃　）
・類似表現の使い分けと指導法　（アルク）
・たのしいにほんご　中学年初級用・高学年初級用　（小学館）
・にほんごを　まなぼう教師用指導書１、２　（文部省　ぎょうせい）
・にほんごを　まなぼう児童用教科書１、２、３　（　〃　）
・「いっしょに学ぼう－外国人児童のための日本語指導」　（神奈川県教育委員会）
・日本語だいすき「たんごのほん」「ワークブック」「テキスト」　（むぎ書房）
・にほんご１２３（１）　練習帳、（２）　練習帳　（グループ１２３）
・日本語ワークシート　（綾瀬市天台小学校）
・こどもことば絵じてん　（三省堂）
・ことば使い方絵じてん　（三省堂）
・ものの名まえじてん　（　〃　）
・こどもことばえじてん　（角川書店）
・はじめてのもじ・ことば　（学研）
　１もののなまえずかん　２あいうえおえほん　３うごきのことばずかん
　４ようすのことばずかん　５カタカナあいうえお
・五味太郎　言葉図鑑　（偕成社）

資料

・子どものための６か国語絵単語帳 ーどこ　行くの？ー　（チャレンジ日本委員会）
・　　〃　　５か国語　　〃　ーこれって　なに？ー　（　　〃　　）
・教科書ワークブック　国語（ポルトガル語）１年、２年　（大府市教育委員会）
　　〃　（スペイン語）１年、２年　（　　〃　　）
　　〃　（ポルトガル語・スペイン語）３年（　　〃　　）
・教科書ワークブック　国語（中国語）２年　（　　〃　　）
・うたでおぼえる日本語（ポルトガル語版）１年～６年　（　　〃　　）
・日本語コミュニケーションゲーム８０　（ジャパンタイムス）
・新日本語の基礎　漢字練習帳Ⅰ，Ⅱポルトガル語版　（スリーエーネットワーク）
・にほんごであそぼうⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ　（凡人社）
・絵で学ぶ擬音語・擬態語カード　（スリーエーネットワーク）

②カセットテープ
・テープ　ー ポルトガル語、スペイン語、韓国・朝鮮語、英語、ロシア語
　※光村図書小学校１年教科書上「かざぐるま」、下「ともだち」を上記言語と
　　日本語で朗読しています。（ロシア語のみ１０分間）
上記テープの指導用手引き「母国語による学習のための教材」（茨城県教育庁指導課）
・ＮＨＫことばの教室１年、２年　（ＮＨＫ，　学研）

③ビデオ
・わくわくひらがな①、②　（学研）
・カタカナってなあに　（ピーエスジー）

④ＦＭタウンズマーティー
・漢字の絵本　（富士通ＳＬ）
・ひらがなの絵本　（　　〃　　）
・メルヘン図書館グリム童話「赤ずきん」「オオカミと７匹の子ヤギ」（ぎょうせい）
・ハイパー絵本日本昔ばなし１、２　（　　〃　　）
・漢字筆順練習ナゾラー１年、２年　（インフォーテック）
・言葉遊び８Ｈｉｐ　ＣＡＴＣＨ　（ＣＲＣ総研）
・日本語入門　第１巻～第４巻　（インフォーテック）

⑤カード・かるた　など
・くもん式の　（くもん出版）
　ひらがなカード、　ひらがなあそび（カード版）漢字ことばカード１～５
　おはなしカード１～２、　こよみカード、　反対ことばカード、
　たべものカード、　お店カード

・おもしろい漢字カード（７カ国語付き）（２）－１、（２）－２　（杏文社）
・五味太郎　しりとり　ぐるぐるカード　１～４　（リブロポート）
・五味太郎　猿・るるる・かるた　（絵本館）
・おもしろい　カタカナフラッシュカード　（杏文社）
・おもしろい　あいさつカード　（ラテンアメリカ協会）
・ことばあそびジュニアセット（№６絵カード）　（すずき出版）
・絵で教える日本語　（凡人社）

⑥ CD-ROM

・はじめての日本語
・耳で覚える日本語
・カルロとはじめるカタカナ
・五味太郎言葉図鑑
・カルロといっしょにあいうえお
・ににんがし（２×２＝４？）
・教科書の漢字ナビ１年、２年、３年　（文英堂）

Ⅱ.辞書　など

・和西辞典　（白水社）
・西和辞典　（　〃　）
・スペイン語ミニ辞典　（白水社）
・SPANISH・ENGLISH　ENGLISH・SPANISH　（TIGER）
・ポルトガル語小辞典　（大学書林）
・日本語→ブラジルポルトガル語辞典　（ナツメ社）
・和露辞典　（講談社）
・パスポート初級露和辞典　（白水社）
・アシスト日韓辞典　（三修社）
・サポート韓日辞典　（　〃　）
・日本語ーフィリピン語ー英語辞典　（国際語学社）
・新すぐつかえる日本語ータイ語辞典　（　〃　）
・すぐつかえるタイ語ー日本語辞典　（　〃　）
・ＳＳ式すぐに話せるロシア語、フィリピン語　（index unicom）
・日中辞典　（小学館）
・中日辞典　（　〃　）
・初級クラウン英和辞典　（三省堂）
・岩波現代中国事典　（岩波書店）
・中国人のための　漢字の読み方ハンドブック　（スリーエーネットワーク）

Ⅲ.教科指導関係

①書籍　問題集など

・小学校の算数＝数と計算・対訳集＝　（川崎市総合教育センター）
　スペイン語、ポルトガル語、タガログ語
・教科書の言葉対訳集ー楽しい学校　スペイン語版　（大和市教育委員会　1995.4）
・　〃　〃　ポルトガル語版　（　〃　）
・ARITMÉTICA　算数学習資料集　ポルトガル語 スペイン語対訳　（綾瀬市教育委員会）
・理科学習資料集　CIÊNCIAS　ポルトガル語　スペイン語対訳　（　〃　）
・くもんしきの入学準備　5，6歳チェックさんすう　（くもん出版）
・くもんしき一年生になるまえに　こくご　ひらがな　カタカナ　かんじ　（くもん出版）
・文章題集中学習　小3、4，5，6，【4冊】　（くもん出版）
・漢字集中学習　小2，3，4，5，6，【5冊】　（くもん出版）
・ことばの習熟プリント　語彙と文法　低・中・高学年用　（清風堂書店出版部）
・計算習熟プリント　低学年用　（清風堂書店出版部）
・学力考査　国語　小1，2，3，4，【4冊】　（教学研究社）
・学力考査　算数　小1，2，3，4，【4冊】　（教学研究社）
・教科書システム問題集　英語　トータル1、2，3年【3冊】　（朋友出版）
・教科書わかるわかるテスト　3年～6年　（　〃　）
・新版漢字の練習（小学校で習う漢字の総まとめ）　（　光文書院）
・文法テスト　国語／ことばのきまり練習問題　1年～4年　（むさしの書房）

②ビデオ

・知ってる百人一首　（Nikk）
・わくわくかけざん九九、わくわくわりざん　（学研）
・知ってる？日本の歴史ーできごと編～83の重要ポイント～　（NiKK 映像）
・知ってる？日本の歴史ー人物編～時代をつくった84人～　（NiKK 映像）
・知ってる？日本の歴史ー時代の流れ編～石器時代から現代まで～　（NiKK 映像）

資料

Ⅳ.国際理解教育関係

①書　籍,(開発教育教材を含む)

【子ども向け】

・「国際理解にやくだつ世界の遊び」　(ポプラ社)

アジア１，アジア２，ヨーロッパ，アフリカ，　北米，南米，オセアニア全７巻

・「きみにもできる国際交流」　(偕成社)

１中国　２韓国　３ｲﾝﾄﾞ,ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃｨｼｭ,ﾊﾟｷｽﾀﾝ，ｽﾘﾗﾝｶ，　４ﾀｲ,ﾐｬﾝﾏｰ

５ﾏﾚｰｼｱ,ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ，ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ　６ベトナム　７ﾄﾙｺ,ｼﾘｱ　８ｲｷﾞﾘｽ　９ｱﾒﾘｶ

10ｶﾅﾀﾞ　11ｵｰｽﾄﾗﾘｱ,ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ　12ﾌｨﾘﾋﾟﾝ　13ﾌｨｼﾞｰ,ﾄﾝｶﾞ,ｻﾓｱ　14ｹﾆｱ

・「日本の年中行事百科」

１正月　２春　３夏　４秋・冬　５民具小事典　(河出書房新社)

・「地球たべもの百科」　(

1中国(ぎょうざ)　2ｲﾝﾄﾞ(ｶﾚｰ)　3ｲﾀﾘｱ(ｽﾊﾟｹﾞｯﾃｨ)　4ﾌﾗﾝｽ(ﾌﾗﾝｽ料理ﾌﾙｺｰｽ)

5ｲｷﾞﾘｽ(お茶とｹｰｷ)　6ﾉﾙｳｪｰ(ﾊﾞｲｷﾝｸﾞ料理),ﾄﾞｲﾂ(ｼﾞｬｶﾞｲﾓ料理)

7ﾌｨﾘﾋﾟﾝ(ｺｺﾔｼ料理),ﾒｷｼｺ(ﾀｺｽ)

・APIC 国際協力ﾏﾝｶﾞ①「アリンゴと日本のママ」　(国際協力推進協会)

・「アジアの子どもたちの絵日記集」　(アジア子どもアートフェスティバル実行委員会)

【教師向け】(授業で使うものを含む)

・ブラジルの教科書　多数　(ブラジル総領事館より)

・「教育課程開発資料　国際教育　地球市民として生きる子ども」(藤沢教育文化センター)

・“BRAZIL　IN　THE　SCHOOL ”　(ブラジル大使館より)

・“CONOZCAMOS　EL　PERU”　「ペルーを知ろう」　(ペルー大使館より)

・「地球家族－フォトランゲージ版」 － 開発教育教材－　(ERIC 国際理解教育センター)

・「地球の仲間たち－フォトランゲージ」－開発教育教材－　(開発教育を考える会)

スリランカ、コートジボワール、ボリビア、エクアドル、パプアニューギニア、ネパール、ハンガリー

・「目で見る世界の動き①　地球環境―水・緑・人間」(ERIC 国際理解教育センター)

・「木と学ぼう － ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾗｰﾆﾝｸﾞﾂﾘｰ活動事例集」　(　〃　)

・「 いっしょにできるよ」　(　〃　)

－ 穏やかにもめごとを解決するための学び方・教え方ハンドブック－

・「ﾃｰﾏﾜｰｸ － ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ な視野を活動の中で育てる」　(ERIC 国際理解教育センター)

・「フード・ファースト・カリキュラム」 食べ物を通して世界を見つめよう　(ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ市民基金「地球の木」)

・「マジカルバナナ」 －開発教育教材－　(　〃　)

・「わたし・あなた・そしてみんな」人間形成の為のｸﾞﾙｰﾌﾟ活動ﾊﾝﾄﾞﾌﾞｯｸ (ERIC 国際理解教育ｾﾝﾀｰ)

・「世界からやってくる私たちの食べ物」　(神奈川県国際交流協会)

・「チャレンジ・ザ・世界の米料理」　(横浜市立上飯田小学校５年)

資料

・『「開発教育」ってなあに』　（開発教育協議会）
・「わくわく開発教育－参加型学習へのヒント」　（　〃　）
・「いきいき開発教育」　（　〃　）
・開発教育シリーズ②「いい貿易ってなんだろう－一杯のコーヒーから考える世界の貿易」（　〃　）
・開発教育シリーズ③「たずねてみよう！カレーの世界」」　（　〃　）
・「国際教育の充実に向けて－具体的な教材発掘と実践」　（横須賀市教育研究所）
・国際理解ハンドブック－ブラジルと出会おう　（国土社）
・国際理解ハンドブック－中国と出会おう　（国土社）
・国際理解ハンドブック－韓国と出会おう　（国土社）

②ビデオ

・いろんな国・いろんな言葉－世界１１カ国紹介－　（ポプラ社）
・世界の１２歳　「体験　友達の国」［１１０分］　（ＮＨＫ　ＢＳ）
・世界の教科書クイズ　（　〃　）
・「ガラパゴス」　地球は生きている　（水中造営センター）
・ワールドトラベルガイド　「韓国」［４４分］　（日本交通公社）
・学校放送　「韓国」　1994.9　（ＮＨＫ教育）
・金剛山　アリラン　韓国　ハルモニ
・牧畜の国ニュージーランド
・バナナ植民地　フィリピン［３３分］　（アジア太平洋センター）
・緑の砂漠　植林が環境を破壊する　ブラジル　［２９分］（アジア太平洋センター）
・世界とつながるくらし－浜松芳北川小学校、浜松元城小学校　（ＮＨＫ教育）
・日本に住む外国人のくらし　（ＮＨＫビデオ教材）
・文春ビデオ「ブラジル」　（文藝春秋）
・ＴＢＳ　新世界紀行　「ブラジル」

【教師向け】

・ＮＨＫ人権の時代―在日外国人と人権―　（ＮＨＫ教育）
①国籍という壁　②何故日本にいられないのか　③共生への道しるべ　［各45分］
・日系ブラジル人　出稼ぎから定住へ―　群馬県大泉町　（ＮＨＫ教育）
・アジア発見　わが一族は４００万人―　韓国　釜山　（ＮＨＫ総合）
・エスニックメディアと日本―１６０万在日外国人の声［４５分］　（ＮＨＫ教育）
・小さな旅　浜松　ブラジルの人達を訪ねて［３０分］　（ＮＨＫ総合）
・特報首都圏　県営団地の〝アジア〟自治会３５分　（ＮＨＫ総合）
・国際団地～愛知県保見団地～　（東海テレビ）

③カセットテープ

・“南へ帰る－ Vuelvo　al　sur”　（６年国語「南へ帰る」に出てくる曲）
・フィリピンのバンブーダンスの曲　（３年音楽「いるかはざんぶらこ」の発展）

Ⅴ.その他

① 対訳集 など

・横須賀市学校通知文翻訳集（英語・スペイン語・ポルトガル語・中国語・韓国朝鮮語）
・横須賀市生活ガイドブック　（横須賀市国際交流課）
　ハングル、中国語、英語、スペイン語、ポルトガル語版
・学校リビングガイド　1992年度版「家庭への連絡編 」（神戸市総合教育センター）
　ベトナム語，ハングル，中国語，英語，西語，葡語訳
・学校リビングガイド　1993年度版「日本語会話編」　（神戸市総合教育センター）
　ベトナム語，ハングル，中国語，英語，西語，葡語訳
・学校から家庭への連絡文 英語，ポルトガル語，スペイン語，中国語訳　（横須賀市教育研究所92年）

・学校用語対訳集Ⅰ　～スペイン語編～　（横須賀市国際教育研究会95年）
・ともに生きる社会をめざして－外国人児童生徒の公立学校入学について－　（川崎市教育委員会）
　日本語，ハングル，中国語，英語，西語，ポルトガル語　全６冊

②研究集録　など

・外国人子女の日本語指導に関する調査研究 《最終報告書》　（東京外国語大学）
・外国人子女教育資料・教材総覧　（文部省海外子女教育課）
・帰国子女適応教育教室研究調査報告書（波多野ファミリースクール帰国時国際学級）
・日本語指導計画とワークシート　（東京都板橋区立志村第四小学校日本語学級）
・日本語指導が必要な外国人児童の調査　最終報告　（教育助成局海外子女教育課）
・外国人児童生徒のための日本語指導－東京外国語大学留学生日本語教育センター編集　（ぎょうせい）
　１カリキュラムガイドラインと評価、２算数（数学）・理科の教科書－語彙と漢字
　３中国語版　文法説明、４ポルトガル語版　文法説明

③その他（進路、生活関係など）

・在日外国人児童・生徒教育状況調査報告書－外国人の子どもたちとともに　（神奈川県教育文化研究所）
・外国人の子どもたちとともにⅡ－学習と進路の保障を求めて　（神奈川県教育文化研究所）
・「ようこそ日本の学校へ」　（文部省）
・外国語を母語とする人のための高校進学ガイドブック

資料

学校通知文翻訳集

1．保健調査票
2．心臓病調査票
3．健康診断の記録 参考
4．尿検査のお知らせ・尿二次検査について 参考
5．尿をとるときのご注意
6．一次検尿結果個人票 参考
7．二次検尿結果個人票 参考
8．ぎょう虫卵検査の実施について 参考
9．ぎょう虫卵検査（採卵の方法）
10．ぎょう虫検査結果個人票 参考
11．ぎょう虫検査の結果、及び駆虫について 参考
12．予防接種を受ける前に 参考
13．ツベルクリン反応検査・ＢＣＧ予防接種のお知らせ 参考
14．結核検診のお知らせ
15．ツベルクリン反応検査問診票（小１／中１用）
16．ツベルクリン反応検査予診票（小２／中２用）
17．ＢＣＧ接種予診票
18．ＢＣＧ接種後の注意・保護者各位へ 参考
19．エックス線直接撮影のお知らせ・受診票
20．健康センターのお知らせ
21．学校から家庭へのお知らせ（スペイン語はありません） 参考
22．水泳学習について 参考
23．水泳カード 参考
24．家庭環境調査票 参考
25．緊急避難時の児童生徒引き渡し訓練について 参考
26．行事のお知らせ（授業参観など）参考

資料

＊＊

［使用にあたって］

① 日本語文と各学校の文を参照し、状況に応じてお使い下さい。
② 参考以外のものは、実際に使用している様式です。
③ 今回の発行は保健関係が中心ですが、今後「翻訳集」の項目を追加いたします。使用しやすいような方法や分類で、各学校でファイルを工夫して下さい。
④ 必要な時にすぐ活用できるよう、翻訳集の管理場所や責任者を明確にするとともに、担当者の交替にともなう引き継ぎも確実にお願いいたします。

＊問い合わせ；生涯学習部　学校保健課 22-8488（保健関係）　学校教育課 22-8479（その他）

＊＊

川崎市総合教育センターが開発した資料

1．小学校の算数　～数と計算対訳集～　１・２　（英語）
2．小学校の算数　～数と計算対訳集～　１・２　（タガログ語）
3．小学校の算数　～数と計算対訳集～　１・２　（スペイン語）
4．小学校の算数　～数と計算対訳集～　１・２　（中国語）
5．小学校の算数　～数と計算対訳集～　１・２　（ポルトガル語）
6．小学校の算数　～数と計算対訳集～　１・２　（韓国・朝鮮語）
7．学校用語集　（スペイン語）
8．学校用語集　（中国語）
9．学校用語集　（ポルトガル語）
10．小学校の社会科　わたしたちの町「かわさき」・対訳集（英語）
11．小学校の社会科　わたしたちの町「かわさき」・対訳集（中国語）
12．小学校の社会科　わたしたちの町「かわさき」・対訳集（韓国・朝鮮語）

第２章
教育材の分類・整理をめぐって

石川 一喜
（東和大学国際教育研究所）

■はじめに

今まで各委員の先生方にいろいろお話しいただいて、最終的にリソースをどう分類していくかということで骨格を作っていかなくてはいけないと思います。３枚ほどレジュメになっていますが、大まかな流れとしては、①ホームページ作成、②ｗｅｂにのせるということ、③教材をどう分類していったらいいかということになっています。これは、委員会に提出されたレジュメからピックアップしてつくりました。それを確認した上で、どういった方法で分類できるかいくつか候補を挙げて、どれかこれという決め方ではなくて、それぞれの良いところ悪いところというのをきちんと皆さんの意見を汲み上げながら、最終的に大体こんな形でまとめていったらどうかなという形で話ができればと思っています。最後に空欄の枠を作ったので、もし何かメモをしたい方がいらっしゃればしつつ、最後に意見をしていただければと思います。まず短く要約的にお話して、皆さんの意見交換やディスカッションする時間を多めに取って進めていければと思っています。

■各委員の提案のまとめ

最初にこれまでの検討委員会での各委員の提案のとりまとめです。金子先生からは、①いろいろなネットワークを作りたい、②新しい交流が始まる場を提供したいということ、③初めて国際教室を担当する先生のサポートや自分のクラスに初めて外国籍の子どもが来た担任へのサポートというのを重視したらどうかという提案があったと思います。村田先生からは、分類整理するために必要とされるものとして、①国際教室のノウハウを盛り込んだ情報、②リスト化、デジタル化されていない情報の収集方法、③ＮＧＯ運営の県内補習教室のリスト等の付加情報が欲しいというようなことが提起されていたと思います。村井先生は、①各個人が持っている手作り教材の情報を交換し合う場が欲しいということ、②国際教室マニュアルのようなものが非常に役立つ、③それをホームページで共有化を図りたいというようなこと、④そして村田先生と一緒ですけど、補習教室リストなどをマニュアルに付け加えて情報交換、教材の紹介をしたいというようなことをおっしゃってたと思います。黒坂先生は、①児童の条件に適した教材をピックアップできる機能が欲しいということ、②お互いのＱ＆Ａみたいなことでアドバイスを双方向でやりとりしたいということ、③実際使っている教員の教材に対する評価というものを付けて、次使う人の参考にしたいということ、④手作り教材を含めた教材のアクセス方法を明記して欲しいということ、⑤大学の研究室とか研究機関であるとか他のセクターとの連携を図りながら、アクセスしづらかった施設の利用や資料を閲覧できるようになればいい、教員だけではなくて地域の人への理解というものも少し促したらどうかということをおっしゃっていたかと思います。

■２つのターゲットについて

これ全体をもう一度見直したときの私の印象ですが、とくに２つのターゲットがあると思います。１つはこれから新しく国際教室を担当する先生に対してで、もう一つは皆さんのように長年経験されてきた熟練の国際教室担当の先生方に対してだと思います。どちらかというと前者の方に主眼を置いてこの事業を取り組んでいったほうがいいのかなという印象を持ちました。教材整備をする上でも、いかに新しく担当する人たちに使いやすい、見やすいものになるように意識してやっていければと思います。具体的にはどのように適切にテキストを選択できるかということや、その教材へどのようにアクセスするかという方法であるとか、もしくはクラスの運営とか授業の実践の仕方などを明記できればいいと思います。それに付随して熟練の方々の情報交換、教員間のネットワークとか、他のセクターとの連携というものを随時図っていければいいと思います。

■分類方法の候補は４つ

実際の分類方法ですが、いろいろな方法があると思います。そこにはブレインストーミング的に網羅的に挙げてみました。どれか一つに絞るというのではなく、いくつかを複合的に組み合わせながら分類していくのがベストじゃない

かと思います。

分類方法の候補の一つは、村田先生の分類の仕方というのがこの委員の中でもかなり好評でした。それを黒坂先生も後押しするような形でそれに沿って分類された資料をお作りになりました。候補１として、外国人児童生徒受入れに関するもの、国際教室に関するもの、外国人児童生徒教育カリキュラムに関するもの、外国人児童生徒指導教材と指導教具、教材の対訳集、パソコン、インターネット教材、国際理解教育に関するもの、母語や母国に関するもの、生活や進路に関するものといったような分け方があります。

２つ目の候補として挙げられるのは、川崎市の実践記録集の最後の資料の分類方法で、日本語学習教材の分類の仕方として、①総合教材、聞く・話す・読む・書くというダイレクトメソッドというような形で分けるもの、②言語要素別教材、仮名教材なのか漢字教材なのか発音教材なのかというような分け方、③対象とか目的別に教材を分けるということで、初等中等教材という分け方と、その他の視聴覚補助教材というような形の分け方です。

３つ目としては、凡人社の日本語教材リストを挙げられます。これはかなり細かい分類をしてまして、この分け方をずらっとそのまま載せました。そのリストの場合は最初の方に教材別、著者別、発行元別、使用言語別、レベル別の索引があって、そこからも引けるようにしてありました。いずれネット上でやる場合はこういった検索がかけられればいいと思います。

４つ目として、これは私が考え出したオリジナルなのですけど、習熟度別フローチャート方式というような形を考えてみました。これは、初めて受け入れる生徒がどんどん日本語を習熟していく度合いによって、例えば最初は初期指導教材→それから橋渡し期にあたるような後期の教材→さらに教科学習をしていく上での学習教材というものを順番に並べていく。これは初めて国際教室を担当する先生が、どれから手を付けていいか分からないというときに、初期指導のときはこれだという、視聴覚教材も入ってくるかも知れないし、クラス運営の書籍も入ってくるかも知れないし、ごちゃごちゃになるんですけども、その段階に応じてここではこの教材を提供しますというような形で分類する。委員の皆さんの知恵を出しあってモデルケースを１つ考えてそこにこの時期にはこの教材、この時期にはこの教材というようなものを、流れとして作ってもいいという気がします。最後に各分類方法の強みと弱みということで、あくまで自分の主観ですけども述べてみたいと思います。

■各分類のメリット・デメリット

候補１の場合は、いろいろ網羅的に教材をきちんと把握できる。黒坂先生がおっしゃったと思うんですけど、外国人児童生徒指導教材教具のところが一番数が多いので、そこをどういう基準で整理していくのかが課題だという話がでていたと思います。

候補２の場合は、項目立てが明確で分かりやすかったり、これだけだとあまりにも大雑把な分け方なので備考欄で少しこの教材はこのときに使うとか、このレベルの人に使うというような補足をしていたみたいです。但しこれは日本語学習という要素だけで、勿論この報告書自体がそういう目的で作られているので当然なのですが、教室運営の資料だとか、国際理解教育関連の教材が欠けているというデメリットがあります。

候補３の場合は２つの視点から教材をアプローチできるというのがメリットかと思います。逆に項目がありすぎて見づらかったり、候補２と同じですが、日本語指導の教材に偏っているので他のものもカテゴリーとして加える必要があると思います。

候補４に関しては、例外的なケースには対応しきれない可能性もあるかと思いますが、大体のスタンダードの流れが分かるかと思います。おそらく候補１，２，３より手間はかかると思います。何回も集まってディスカッションする中でここにはこの教材というのを決めるときに、各委員の皆さんの思いも違うでしょうし、そこでコンセンサスを得ていくという時間がかかるというのがある。事業としていつまでに結果を出さなくてはいけないという場合に難しい方法ではあると思います。

以上大雑把ですが、是非皆さんのご意見を伺えればと思います。最後のところに自分の考えを書きましたが、説明不足で分かりづらいかと思いますので、そういった点も加味していろいろ話をしていただければと思います。

2002/2/28

第４回　国際教室等における教材整備のための検討委員会

ー教材整備のための分類方法素案ー

東和大学国際教育研究所
石川一喜

１、これまでの検討委員会での各委員提案のとりまとめ

▼金子先生
- 実際に使われる、使いやすいサイトを作っていかなければならない。作った後もサイトを訪れた人たちのネットワークが広がり、新しい交流が始まる場の提供をしたい。
- 望まれるサイト像は、「初めて国際教室を担当する先生へのサポート」「自分のクラスに外国人児童が入ってきた担任へのサポート」

▼村田先生
- 教材等の情報を分類・整理するために必要とされるものとして、「国際教室運営のノウハウを盛り込んだ情報」「リスト化、デジタル化されていない情報の収集方法」「県内補習教室（NGO 運営）のリスト等の付加情報」

▼村井先生
- 手作り教材のような個人の教員だけが持つ情報、他校の独自の実践例など、教員間・学校間の情報交換し合う場がほとんどなく惜しいので、そのような機会の提供を期待したい。
- 経験の長い担当者たちの蓄積したノウハウを１つにまとめて、「国際教室マニュアル」のようなものがあれば非常に役立つ。ホームページ等で情報の共有化ができればより理想的。
- 国際教室と補習校との連携や情報交換、教材紹介などを活発化させるためにも、補習校リストをそのマニュアルに付加したい。

▼黒坂先生
- 児童の条件に適した教材がピックアップできる機能がほしい。
- 質問、助言のできる双方向のやりとりができるといい。
- 使用者の教材に対するコメント（評価）を是非つけたい。
- 教材（手作り教材含め）へのアクセス方法を明記してほしい。
- 施設利用や資料閲覧ができるよう大学の研究室、研究機関との連携を図る。
- 地域の人など教員以外にも分かりやすいものにしたい。

これらのことから特に留意すべき点は、

①*新たに国際教室を担当する先生へのアドバイス*ー適切なテキストの選択、クラスの運営・授業の進め方など

②*長年の経験のある担当者間の情報交換*ー教員間のネットワーキング、他セクターとの連携

２、分類方法のブレインストーミング

「年齢別」「学年別」「言語別」「習熟度別」「人気(おすすめ)度ランキング順」「発行年順」「タイトル 50 音順」「内容別」「目的別」「用途別」「教材・教具別」「出版社別」「資料の所在地(保管場所)別」etc

＊これらのどれか１つの分類方法に依るのではなく、いくつかを複合的に活用して分類する方が有効なのでは？

資料

3、 分類方法の候補

候補Ⅰ　村田先生(黒坂先生)方式

① 外国人児童・生徒受け入れに関するもの
② 国際教室運営に関するもの
③ 外国人児童・生徒教育カリキュラムに関するもの
④ 外国人児童・生徒指導教材（日本語・各教科・その他）
⑤ 外国人児童・生徒指導教具（日本語・各教科・その他）
⑥ 教材対訳集
⑦ パソコン、インターネット教材
⑧ 国際理解教育に関するもの
⑨ 母国・母語に関するもの
⑩ 生活・進路に関するもの

候補Ⅱ　川崎市教育委員会方式　引用：『平成12年度川崎市・日本語教室実践記録集第18集』

① 総合教材（聞く、話す、読む、書く、ダイレクトメソッド）
② 言語要素別教材（かな教材、漢字教材、発音教材）
③ 対象・目的別教材（初・中等教材）
④ 視聴覚補助教材（絵教材、OHP用教材、スライド、テープ、ビデオ）

候補Ⅲ　凡人社「日本語教材リスト」方式　引用：凡人社『日本語教材リストNo.31 2001～2002』

① 日本語学習者教科書（総合教科書、ビジネスパーソン・研修生向け、短期滞在者向け、留学生向け専門分野、子ども向け、読解、文法、発音・聴解、表記〔かな・漢字〕、語彙・表現、作文、練習問題、日本語能力試験対策、大学入試対策、学校情報、日本語学習関連副読本、日本事情、定期刊行物）
② 視聴覚・補助教材（ビデオ、コンピューター、OHP、カセットテープ、カード・ゲーム・絵教材、絵本・子ども向け補助教材、図表）
③ 辞典（日本語学習用辞典、各国語辞典、国語辞典、漢字・漢和辞典、語学・文法辞典、表現・用字用語辞典、比較文化辞典）
④ 教師用参考書（日本語教授法、教室活動参考書、日本語概説、音声・音韻、語彙・意味、文章表現、文法、表記、言語学、日本語教育能力検定試験対策、日本語教育事情、異文化・国際理解教育関連、日本語関連副読本、定期刊行物）

＊巻頭に「教材別」「著者別」「発行元」「使用言語別」「レベル別」の索引がある（「教材別」「著者別」「発行元」は50音順、アルファベット順に。「レベル別」は、初級、初中級、中級、中上級、上級、初級～上級に分けている）

候補Ⅳ　習熟度別フローチャート方式

児童・生徒の発達段階、日本語習熟度に応じた適切な教材を選択できるよう、1つのモデルケースとしてのフローチャートを提示する（但し、それが「絶対」なのではなく、その教員や児童・生徒の個々の事情、特性に応じて融通が利くゆるやかなものであることの断りは入れておく）。その流れにある程度沿えば、初めて担当になった教員にでも指導しやすいものにする。

大まかな流れとしては、

・日本語学習指導の視点から
　初期指導教材　→　移行期（橋渡し期）教材　→　教科学習
・生活指導の視点から
　生活適応　→　国際理解教育　→　特性を生かした教育

・担当する教員の立場から

児童・生徒との理解（教室運営）　校長・同僚の理解（学校運営）　家庭・地域の理解（父母との連携）

4、各分類方法の強みと弱み

	強み	弱み
候補Ⅰ	・総合的、網羅的に教材を把握できる	・「外国人児童・生徒指導教材、教具」をどのような基準で整理するかが課題
候補Ⅱ	・項目立てが明確で見やすい ・教材選択のヒントとして「備考」欄で補足している	・教室運営の資料が欠けている ・国際理解教育関連の教材が欠けている
候補Ⅲ	・マトリックス的に適切な教材を選択できる ・教材へのアプローチが多様	・項目立てが多くて、見づらい ・日本語指導に偏っている（生活指導、進路指導教材の不足）
候補Ⅳ	・初めて国際教室の担当になった教員でもある程度対応していける ・“スタンダード”な流れが把握できる	・例外的なケースの場合に対応しきれない可能性がある。 ・分類が煩雑になり、作業に時間がかかるため、本事業の時限との兼ね合いが必要

＜各委員の分析＞

	強み	弱み
候補Ⅰ		
候補Ⅱ		
候補Ⅲ		
候補Ⅳ		

〔その他〕

資料

■質疑■

Q：候補4がよく分からない。パソコンの使い方というのもそこにできる機能というのもよく分からないので･･･。

僕もよく分からない。金子先生とか村井先生もおっしゃったと思うんですけど、現場の実態もちゃんと把握できてない、もしかしたら解釈が間違ってるのかもしれません。ただ、初期指導にはこういった教材が必要だというのをいくつかピックアップできる訳ですよね。日本語学習に関してもそうですし、初めてクラスを持ったときの生徒との接し方に関する本があるとか。ある程度段階が過ぎたとき、次に橋渡し期のものとして語学に関していえば中級レベルの教材が必要になってくるとか。中級レベルの教材としては、ビデオ教材ならこれ、日本語練習帳ならこれ、といったイメージで考えた。

Q：候補4の「担当する教員の立場から」っていう部分を教えてほしい。

例えば日本語学習であれば初級、中級、上級という形で流れていくと思うのですが、初期指導教材から始まって、次の移行に当たる教材があって、最後教科学習をちゃんと理解できるようなレベルに至るまでの学習があるのかなということ。必ずしもこの流れにはなりません。強引に流れを作ったんですけど、生活適応も最初もやるけど最後もやらなくてはいけないでしょうし、国際理解教育的なことや異文化理解教育的なことも、最初の段階も最後の段階もやらなくてはいけない。まず最初に生活適応があって、他者を理解するといった教育があって、最後に個を押しつぶさないで伸ばしていくような教育があるのかなという一つの形としての流れを考えてみたということ。教員側からすれば、これは流れというよりは３つの視点があるだろうなということで、自分が受け持った児童生徒とどう対応していくか、学校運営という意味での校長や周りを取り囲む同僚の先生たちとどういう風に国際教室を進めていくか、国際教室に対する理解を深めていくか、また家庭・地域、父母との連携もあるだろう。そういう視点で何か捉えられないかという趣旨でまとめたもの。

Q：初めて国際教室の担当になった教員は、その子が初級か中級かあまり分からないと思うが･･･。

そこはイメージしていなかった。あくまで日本語を喋れない児童を想定して書いたので、そうなってくるとさっきの例外的なケース、例えば初めて日本に来たとか、全く日本語を喋れない子というケースにしか対応しきれないのかもしれない。

■討論■

村井　全然喋れない子が入ってきたときに初めて担当になった人が大変なのは皆さんご承知だと思うが、国際教室とは別にある程度教員としての経験が積み重なっていくと、日本生まれだけど通級している子とか、ある程度喋れるけど国際教室に来ている子にはどの程度のものをどんな感じでやればいいかということに関しては、過去の教員としての経験が生きるので初めての担当でも何とか対応はできる（適切かどうかは別として）。一番困るのは初めての担当者のところに何も喋れない子が入ってきたときなので、このプロジェクトの趣旨からいくと、ここのところに照準を多めに当ててもいいかなと思う。

神崎　候補４の場合は先生方自分で思い返していただいたらそれぞれが経験を持ってらっしゃると思う。何パターンかつくれるかなと思いますが･･･。その中から絞り込むか、いくつかを混ぜ込んでいくか･･･。

石川　その摺り合わせも時間がかかると思う。例えばＡさんは最初にこの教材を使うけど、Ｂさんはそれは最後でこっちが最初だという難しさがあると思う。逆に割り切って、便宜上、段階１、２、３というふうにある程度分けてしまって、その中

にそれぞれ教材を押し込んじゃってもいいのかなと思う。危険性もあるだろうけれども･･･。そこの辺りを現場の先生のお話を聞ければなと思う。この分類のイメージはできますか。それすらできないのであればこの分類の仕方は困難なのだと思います。

黒坂　すぐに役立つということになると候補４だと思います。とりあえずどこから始めたらいいか迷ってるときはこの中から探してみようと思うのではないか。

石川　今まで３回皆さんの現場の話を聞いてきて、僕としてはそこら辺がすごく強く印象に残ったんですね。初めて受け持った先生がやっぱり大変でどこから手を付けたらいいか分からないという声が一番強く感じた。なのでそこに主眼を置いた分類方法でもいいのかなと思っています。

ﾔﾏﾀﾞ　初めて外国人の子どもを受け持つ先生は、この子が初級なのか中級なのか調べるのは難しいと思う。学校から電話があって、「もう何もできない、大変です、来てください」と言われて行ってみたら、他の子たちと比べたら結構できてるし、子供同士で喋ってるというようなケースもあるんですよね。

石川　フローチャートも３つくらい視点を分けられないか。日本語学習、生徒指導、生活指導のフローチャートみたいなもの。例えばその生徒に接するのは勿論初めてだから、一からやっていかなくてはいけないけども、日本語をある程度喋られればそれは日本語の部分は中級の段階からいってもいいのではないか。個々の生徒の事情・背景に合わせながら３つのフローチャートに即して段階を選択できるようなシステムだといいと思う。つくるのは大変ですが･･･。

黒坂　国際教室の担当の先生は、日本語指導協力者と子どもとの接し方が違うと思う。担任の先生から聞き取ることもできるし、毎日その子たちの生活を見ることもできる訳だから、日本語がどの程度話せるのか、学習はどの程度ついていっているのか担当が変わっても引継ができる。ただ、突然呼ばれていって「担当してください」と言われる先生だと大変だと思う。ある程度学校の中に常駐する国際教室担当の場合はその子の様子というのはある程度長い期間をかけなくても、いろんな情報を集める手だてはあると思う。日本語指導員の先生たちで突然担当をさせられた方も横須賀なんかも大勢いらっしゃる。その場合は難しいかもしれない。

村田　この委員会を作るというのを聞いたとき、今まで無かったことなのですごくいいなと思った。「教材がどこにあるのか分からない」、「その教材があるところに行って見たい」、「自分で使ってみたい」。私の考えは、そうした望みに少しでもこたえること。単純にそれである。ですから最初の段階では、細かな分類の方法よりも、とにかく何であれ、教材があればいいと思った。委員会が、次年度もし続けられるのであれば、提案されたようなプログラムをみんなで検討していければと思う。初めて担当する先生もそうだが、私のように何年も担当してても、手元にある教材は少ないので、教材が揃えられているそういう場所があればそこに行って使いたいものを探してみたいなと思う。とにかく外国人児童生徒教育に関する教材がどこかにまとまって、自由に見られて触れてという場所が欲しい。

石川　作業の段取りについてはどのようにイメージすればよいか。

小山　国際教室の教材整備に特化した検討委員会としては今年３月まで。このままの形で来年度以降続けるかどうかは別として、検討委員会を更に拡充するような形で来年度も展開できると思う。ｗｅｂ上に細かくカテゴリ分けして全部の教材をアップロードするという作業は来年度に入っ

てから充分できると思う。その意味では、いまここで細かくカテゴリーやコースデザインまで決めてかかるというよりは、４月以降に試行的なデータベースをインターネット上に上げて、どんどん直していくという感じなのだと思う。
村田先生が今おっしゃられたリソースセンターというか、できれば県内で最低でも１カ所、実物教材が手にとって借りられたり、コピーを取ったりできるような場所を実現させるのにはもう少し時間がかかると思う。ここで協会の方で具体的に来年度すぐにということは難しい。ただ、想いとしてはそういったリソースセンター的なものを中期的には県内のどこかに作っていければと思っている。それに向けてもまずはデジタル情報で教材情報の所在地を含めた情報提供を来年度中に始めたい。

石川　初めて国際教室の担当になった先生のためのフローチャートみたいな形で教材を整備させていくにせよ、最初の段階では、村田先生が最初にされたようなやり方に沿って分類をした上で、組み替えなくていくのでいいのではないか。とりあえず皆さんが持ってるもの、知ってるものをこういった分け方で分けた方がいいのかと思う。

黒坂　村田先生方式の、例えば②の国際教室運営に関するものの一覧は、児童生徒の理解とか担当する教員の立場からというふうに流れを追って組み替えられる。また④と⑤は、日本語学習の視点から実際に進めるフローチャートを意識して順番に並べることもできるのではないか。

小山　今日の作業としては、カテゴリーを決めて細かいことを議論するというよりは、今後もカテゴリー分けを含めて変えていける可能性を充分に含みつつ、「これは是非盛り込んで欲しい」とか、大きな方向にかかわる意見を出し合うことでいいと思う。どの分類候補にするのかを、現時点できっちり絞りきる必要はないと思う。大まかに候補１（村田先生案）で当面やって、今後少しずつ中身を精査していくということでもいいのではないか。

石川　この場では、ベースとしては候補１を採用しつつ、候補２、３に含まれる今まで無かった視点・項目を参考にしながら、カテゴライズに向けた意見を出してもらう方がいいのではないか。

金子　並べ方とか分け方については、実際現場として使う人間として、村田先生が最初に提案された候補１はすごくいいと思う。ただ、それが順番に表形式に並んでいるのでは面白くない。事態は、子どもが今日突然入ってくることで、学校がパニックに陥るところから始まるわけですよね。そういう一連の流れを追いながら、この段階ではこういうものが使えるという視点にリンクしていくものがほしい。子どもが編入してきてからの生活の流れを追う中で、「こういう状況ではこんな教材教具がある」という視点。入ってきたときには、教材教具の選択以前に、まずどういう形で対応するかを示す「緊急マニュアル」みたいなものが必要になると思う。そういう状況の流れを追いながら、局面に応じた場面場面で教材・教具類のリストにリンクして飛んでいく。実際の事例を挙げながらそういうものをつくってみると面白いと思う。

神崎　教育センター図書館のコンピュータで日本語指導というキーワードで検索すると、膨大な数がヒットする。自分が探しているものが分かっている人はその中から探しきれるが、初めて担当する人がイメージだけで本を探してるような場合、題名だけとか、そんな情報ではとても探しきれない。私も実際に担当になったことがないので、自分が国際教室の担当者になったら、最初は何をしていいか分からないと思う。誰かの実践例、「こんな風にやってますよ」という流れがあったほうが、名前から探していく以外に手がない

初心者にとっては助かるなという気がする。

金　教材の所在地情報は最低限整理するにしても、いまある資料を網羅的に収集するというよりは、たとえば「評判が良い」という観点から或る意味で抽出しないと、掲載データ数だけを誇るデーターベースでは意味がない。実際のリストは、すでに先生方に出していただいたところを中心に膨らませていけばいい。「実践者の目から見て良かった」ものが出てくればよい。その意味で偏りがあっていいと思う。

小山　今ブラジルにいるフクナガジュンコさんのＨＰを見ると、３行ぐらいつつ教材を使ったときのコメントが全部出ている。人の息づかいが感じられるというか、全部はできないまでもそういうのができるといいと思う。

石川　フローチャートみたいなものを作るのであれば、皆さんが実際知っている教材を全部出して、それのみで作ってもいいのではないか。

金子　評価を入れてみるというのは大事だと思う。使えないものを紹介してもしょうがない。

小山　できれば早めに皆さんに協力していただきたいのが、神戸の村山先生だと思うんですが、「初めて国際教室担当になった人への心得」みたいなものをＨＰに出していらっしゃいますよね。あれが絶対の方法ではないかも知れませんが、先ほどから議論されている、初めて担当になって一体何から手をつけていいか途方に暮れてしまう場合に、少しでも心の支えになるものががあるといい。村山さんのものは、まだバージョンアップされてない。その辺りも皆さんの知恵で面白いものができると貴重なものになると思う。

金子　この委員会には、現場で担当している者が加わってますので、こういうのが欲しいんだというのが話し合いで出てくればいくらでも協力できる。

村井　確認しておかなくてはいけないのは、最大のターゲットは誰なのかということ。そこをみんなが共有すると目的に向かって絞りがかけられるかも知れない。一つに絞らないまでも。

小山　初めて担当する人なのか、中級者なのか、ベテランなのか。それは大きな問題ですね。国際教室が設置されてない所の方が全国的にも実際多い。統計的な資料を持っていないので神奈川の状況が分からないが。前に村田先生がおっしゃっていたと思うが、国際教室も大事だが、むしろ国際教室が設置されていない所の先生で、初めて外国籍の児童生徒が入ってきた場合の情報提供というのが非常に問われているのではないか。でもそのあたりについては、皆さんにもいろいろな意見があると思うので出していただいた方がいい。

金子　教えてあげる立場と言うよりは、自分たちも日々困っていることの連続だ。何年やってもまだ駆け出し。そういう実践の中から、「こういう部分では壁にぶつかって困った」とか、「こうしたらちょっとうまくいった」とか、「やっぱり調子に乗ったらだめだった」とか、書けるのはそういう部分だ。実践を重ねてどうだったのかというレベルで書くのが一番説得力がある気がする。誰を対象にするかは難しい問題だ。

石川　「初めて国際教室を担当する先生」だけの話になっているが、実際皆さんのようなベテランの先生方が感じている問題、課題というのはどういったところか。そっちの方が重要性が高かったという場合もあるかもしれない。そうだとしたら、そちらにターゲットを転換していった方がいいという気もする。

村井　私は、「橋渡し期」の子にどんな事すれば

いいのかがはっきりとは分からない。現実は、国語とか算数の補習に尽きている。そればかりでは子どもの興味も向かないし･･･。だから、教科書プラス自分の手作りのもの、カルタとか漢字カードとか入れながらやっている。「橋渡し期」の子に対して私はいま手探り状態。初期の子に対してはむしろ今までの経験があるから、「あいうえお」をどういう風にやっていけばできるかだいたい見当がつくが、中級というのか、「橋渡し期」の子をどうしていいのかが明確には分からないまま自己流で進めている。

金子　いま文科省でやっているカリキュラム開発は、まさにこの部分の子どもたちにターゲットを当てたもので今まで欠落していた部分。もう喋れるようになったら「この子の日本語指導は終わり」という状況だった。よく考えてみたら全然できないのではないか、「しゃべる」ことだけでは「日本語を理解している」とは言えないということ。自分の学校の子どもたちもほとんどがこの部分に入っているので、それについてはこっちが「答えが欲しい」という状況。

小山　その辺はまだ教材の数としては少ない訳ですよね。

黒坂　私は２年しかやってないのでベテランでも何でもないが、初期の子はいなくて、今はそういう子ばかりだ。(彼らが母国と日本の間を）行ったり来たりするということはないですか。ブラジルに半年間行って戻ってきて、また帰って戻ってきてというふうに。たとえば、６年生の子と６年の「まとめ」を少しやってみたのだが、分数を一切知らなかった。分数を最初から説明して、ポルトガル語を使ったりして何とか理解できたのだが･･･。中学の受験のときになって、「繰り上がり繰り下がり」を手でやってた例とか。南米の子はそうだ（計算の仕方が違う）って言うんですけど･･･。１０の合成とか分解とかしないで足していく。おつりもそうやって出していく。日本人の子だと小さいときに頭の中でやっていることを、中学に行ってもずっと積み残してやっている。今更どうしようもないのだが、考えてしまう。どの所をどうやって埋めてあげればいいのか、よく分からない。たとえば九九が分からないまま来てたり。学力がない子ではないのだが、そういうことがずっと積み重なっている。

村井　親の母語の影響というのか、親が家で日本語を喋りませんよね。そうすると語彙が増えていかない。それに伴って算数の教科書に書いてある事が理解できない。親が日本語を喋るか母語を喋るかで違いが出てくる。

金子　その子たちは家で日本語の本は読まないんですか。

村井　ほとんど読まないですね。

金子　ということは、ほとんど読解力というか、語彙が増えない？

黒坂　家ではスペイン語を使っていても、本屋で立ち読みするほど本を読むのが好きな子は、他の子どもに較べると全然語彙の数が違う。やはり環境がかなり影響すると思う。その子の思考とか興味の持ちどころなのだろうが･･･。進んで読まないと、同じようにやってる日本の子とは差が出てしまう。

村井　語彙が足りない部分をどうやって私たちが補っていけばいいのか、これだという方法が分からないので、自己流でやっている。

小山　今の話を聞いてると、絵カードとか教材教具のレベルではなくて、子どもの見取り方とか、経験のデータベースみたいな話だと思う。そこをＨＰ上だけでやるのは結構難しい。例えばメーリングリストだとか掲示板だとか、手法はあるとは思

うが、分けて考える必要があろう。全部をＨＰの教材教具リストに埋め込むというのは無理がある。経験の共有とか経験のデータベース化という話はインターネットを使うにしても、別の手法を考えるべきだ。村田先生がおっしゃったような所在地情報や「ここに行けばこうやってアクセスできる」みたいな情報は、データ型で整備すればキーワードで引っかけて分類ができるが･･･。分けて考えた方がいいような気がする。それは外国人児童生徒だけではなくて、子どもの見取り方のような「経験」は、教員としての経験の浅さ深さ、資質とか、いろいろな要素がある。そこを教材一覧に載せるというのは無理があるのではないか。

黒坂　いま国際教室にいる子どもは、「橋渡し期」の子どもがすごく多くないですか。今来たばっかりの子というよりは。

村田　横浜市の国際交流協会でお話したときに、県央の担当の先生から全然教材がなくて、どういう教材があってどういうのを使えばいいのか分からないという先生がいた。実際に教材を手に取れればいちばんいいのだが、最低でもインターネットで検索して教材を見つけて、使うときにどこへ行けば手に入るかが分かる、そういうものがあれば、最初としては成功なのではないか。いま出てきたような部分は次の段階としてどんどん補っていけたらいいと思う。凡人社のリストは、それだけを見ても実際は分からない。だから私は、凡人社に実際行って自分で見ている。そうすると欲しいものが見つかる。そういう方法が一番いいがすべての人ができるわけではないので、少しでも近づけるような形でｗｅｂ上に何かができるといいと思う。そのときも教材の名前だけあっても中身が分からないので、どういうものか分かるようにしたほうがいい。例えば写真とか何ページ分か載せたり、コメントをつけたりとかして･･･。

小山　いま出たようなお話しは一気にはできないにしても、段階的に考えると、既存のデジタルデータを村田先生方式で一度分類してみて、そこに例えば金子先生が「これが私のお薦め」のようなコメントを付ける作業をする。まず所在地情報を含めてこの村田方式で分類して、とりあえず早い段階でｗｅｂに上げてみることにしたい。そのあとにコメントを少しずつ付けていくような作業をみんなでやっていく。

村田　先生が参考で使う分の情報だけでも、例えば著作権の問題はよく分からないが、千葉にメーリングリストで英語の教科書を他の言語にして全部載せたりする先生がいる。九州とか関西とかでいろいろ研究されていて沢山教材を持っている。取り寄せることができるみたいなので、神奈川県にある教材に限るのではなくて、現在分かっているものだけでも今回対象にしてみたらどうか。

小山　村田先生がおっしゃったようなところがＨＰを持っていれば、そこのリンク情報をつけることは勿論できる。

ﾔﾏﾀﾞ　「橋渡し期」の子どものことは、今後、課題としてクローズアップされていく問題だと思う。今後、議論を深めていきたい。

あとがき

東和大学国際教育研究所　石川一喜

「国際教室」と聞いて、それがどういったものなのか、どれだけの人が正確に回答できるであろうか。教員でさえも勤務している学校に外国籍児童生徒が一人も在籍していないのであれば、もしかするときちんと説明できない場合もあるのかもしれない。とかく国際教室の役割は校内で軽んじられ、同僚からはなかなか理解を得られないという現状がそこにはある。その設置に対してある程度の必要性を認識してはいるのだが、結局は「主流」と「傍流」、「マジョリティ」と「マイノリティ」として暗に線引きをし、ますます周縁に追いやっているという構造があるのだろう。実際にはその「傍流」の部分にも「主流」にある子どもたちと同等に、またはそれ以上に尊い学びが存在しているにも関わらずである。ただ、国際教室という空間を尊重し、そこに集う子どもたちと目線を同じにしながら、日々彼らとひたむきに向き合っている教員も少なからずもちろんいる。幸いにも今回、私はこの「国際教室等における教材整備のための検討委員会」でそういった真摯に取り組む教員の方々と出会う機会に恵まれた。そのような出会いは、現場を十分に把握できていない研究者の端くれである自分にとってこの上なく貴重であった。

私が数回の委員会において現場の先生方から強く察したのは、初めて国際教室の担当になり戸惑う教員への対応・支援、そして初期指導から原学級での教科学習へ移行する際の「橋渡し期」のカリキュラム開発の２点を緊要の課題にしているということだった。前者に関しては、外国籍児童生徒を指導していくことを重荷に感じ、担当教員が問題を１人で抱え込んでしまう場合が多々あり、バックアップ体制の未整備が背景にあることを感じた。学校全体がその状況を積極的に理解しフォローしていく土台はまだまだ脆い。後者に関しては、あるレベルまで日本語能力が達すると「できる」ものと判断され、生徒児童がないがしろにされている状況がある。この過渡期における適切な教材の決定的な不足も問題だ。

そのような意見を先生方が投げかける過程において、問題の提示だけをし、それを悲壮なものとして片付けるようなことは決してなかった。逆に、こういった国際教室の現状そのものを反映する生きた現場の声は、「彼ら自身が進もうと思った道をきちんと歩ませたい」という方向へ常に向けられていたように思う。そう思えたのは、外国籍児童生徒それぞれを一人の大切な人間として接し、単に「生徒－教師」という関係に留めなかったからだろう。そういう関係にあるからこそ、既存の教材だけでなく個々の状況に応じてオリジナル教材を作成したり、毎日の子どもたちの表情によって授業に創意工夫を凝らしたり、親身になれるのある。そういった丁寧な実践を重ねてきた先生方の声がこの検討委員会で共有されたことの意味は大きい。

今回の検討委員会はひとまず年度末で区切りをつけるが、この取り組みはまだ緒についたばかりである。外国人児童生徒が自分らしく生きていける環境をつくっていくには、ホームページ開設や「国際教室運営マニュアル」の作成、地域や他セクターとの顔の見えるネットワーキング等やるべきことはまだまだ山積みにされている。それにひとつひとつ取り組んで望むべき環境へ近づいていくには、今回、委員会の中で発せられた声のそれぞれを大切に紡いで束にしていかなくてはならない。それが太い縄になって外国籍の子と他の子とをしっかりと結びつけるよう、これから更に別の所で発せられている声を束ねていくこともしなければならないだろう。そうして段々と縄が太さを増す時、私が感じた前述の２つの課題はクリアされていくだろうし、願いを具象するものとして、欲しい教材まで容易にアクセスできる教材センターやシステムもできていくに違いない。

この検討委員会の取り組みをきっかけに、発せられた声が全ての教員の胸に届き、心を突き動かすくらいに響いていくことを願って止まない。

国際教室をめぐる課題と展望
～おもに教育材の収集・整備・共有化の問題をめぐって～

●国際教室等における教材整備のための検討委員会●

石川　一喜（東和大学国際教育研究所）
金子　正人（横浜市立いちょう小学校）
神崎　洋一（神奈川県立教育センター）
黒坂　陽子（横須賀市立浦郷小学校）
阪本　智子（川崎市教育委員会 人権・共生教育担当）
廣澤　瀧男（神奈川県立教育センター）
村井　典子（横浜市立下野谷小学校）
村田　栄一（横浜市立金沢中学校）
柳田　　隆（横浜市教育委員会）
ヤマダ・キヨコ・ベッティー（横浜市教育委員会）

小山紳一郎（神奈川県国際交流協会）
金　　迅野（神奈川県国際交流協会）

●発行　財団法人 神奈川県国際交流協会●

●2002. 3●

宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。

宝くじは、広く社会に
役立てられています。